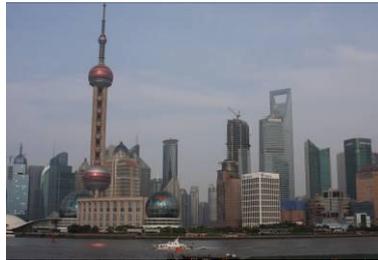


米欧亜回覧の会

中国旅行記念文集

2010・6. 17-24





中国・歴史と上海万博の旅日程表

(2010・6月17日～6月24日)

参加者(敬称略) 納家弘美、西脇美都絵、笠原一恵、古俣美樹、三原 浩、山田哲司、泉 三郎
永島脩一郎、小坂田國雄、高倉宣夫、大森東亜、石垣禎信、梶 春治、小野博正

第一日目 6月17日 成田発(10:10) 全日空NH903便にて大連へ 大連着(12:00)

大連(周水子)空港にて、小坂田氏合流、今回の8日間スルーガイド 鄧鉄輝君の出迎え
専用バスにて、大連市内に出て、大連市内観光

13:30 中山広場(中山は孫文の号)大連の町は、東洋のパリを目指して、ロシアが中山広場
を中心に放射線状に10本の道路が伸びる都市計画を立て、日本が引き継ぎ、完成した。
旧ヤマトホテル(大連賓館)(1914年竣工、太田毅、吉田宗太郎作)の建物・内部を見学。
旧満鉄本社(南満州鉄道: 半官半民、当時の社員11万3000人、鉄道、埠頭、倉庫、工場、炭鉱、
製鉄、地方経営など、初代総裁後藤新平)を外から見学。敷地内に史跡碑あり。

大連港見学一戦前まで満州への入り口で、当時は東洋一の港と云われた。この日は
霧がかかって見えなかったが、現在は湾内の対岸に新大連港の巨大コンテナ埠頭が建設
されて、東北三省からの農業・林業・漁業産品の輸出基地となっている。

敗戦までは、毎日のように大阪・門司より、大阪商船の定期便、うすりん丸、吉林丸、
はるびん丸、ばいかる丸、扶桑丸、熱河丸などが入れ替わり入港し、貨物や船客を
満州各地に送り出していた。当時、満鉄経営の特急『アジア号』は、内地にもなかった、最高
時速130キロ、平均時速82キロで、大連―新京間700キロを8時間半で結んでいた。

旧日本人街(現在は日本人観光用に、新らし住宅街に整備されているが、昔の趣が残らないのは
残念だった。周辺に僅かながらに、昔の面影が偲べる旧住宅も散見された。)

茶芸店にて、中国茶の各種の試飲会を楽しみ、それぞれに買い物をして、大連駅前にあるホテル

17:30 大連九州華美達酒店(RAMADA HOTEL)へ投宿。夕食は、ホテル内の中華・西洋
料理バイキング。今回の、旅行参加者同士の自己紹介や旅行への期待を述べ合う。

大連・旅順は、一時(旅大市)とも、(関東州)とも呼ばれ日露の租借地としての歴史を持つ。
日露戦争前には、ロシアが悲願の不凍港建設を目指し、基本設計を作り都市と港の建設
始めるが、日露戦争に敗れて、日本が取って代わり満州国の基地として、満鉄を中心に
完成する。第二次大戦後は、再びソ連が、占領租借し、今の中国に戻ったのは、その
十年後のことである。大連・旅順市の歴史は、中国の近現代史の象徴的存在だったといえる。

第二日目 6月18日

9:00 終日の旅順観光に出発。

九大橋(大連市郊外にある、姉妹都市の北九州市と大連との友好記念の橋)を歩いてわたる。

老虎灘公園 にて頭が大連にあり、尻尾は旅順港まで連なるといふ伝説のある奇岩と公園広場の
七頭の虎の巨大彫刻や広場でギッタパンバッコで遊ぶ子供たちを眺めてから45キロ先の旅順の
東鶏冠山 へ。ここには日露戦争の時、ロシア軍の北保壘があった場所で、花崗岩製の、保壘は、
長さ10m、深さ6mの要塞が、日本の砲弾で崩れ、有能な敵将・コンドラチェンコ少将が

戦死したことで、4ヶ月の激戦が終わり、1905年1月1日にロシア軍守備隊は降伏した

13:00 旅順新紀元大酒店にて昼食後、再び観光。

水師營会見所 乃木希典将軍とロシアのステッセル将軍が旅順開城交渉を行った会見所。
質素な草むした屋根の建物の中に、当時の激戦の様子を伝える写真と、旅順港の
模型図などを展示し、記念館となっている。ここで、この旅行唯一の、集合写真を撮る。
乃木将軍は、ステッセルから贈られた白馬に乗って、会見に臨んだといわれる。
「昨日の敵は、今日の友」とも謳われた。

二百三高地 1904年2月から、翌年9月までの日露戦争、最大の激戦地。標高203m。
別名、爾靈山という。1904年12月5日日本軍が占領したが犠牲者は日本軍7578人
ロシア軍6739人で、乃木の次男保典も戦死している。記念塔があり旅順港が望める。

旅順港 19世紀末、清が北洋艦隊の軍港として開き、1860年英仏連合軍は占領。日清戦争
では日本が占領したが、三国干渉のあと、ロシアが租借し、日露戦争後から1945年
の終戦まで、再び日本が租借した。戦後はソ連が再租借して1955年にソ連軍が撤退
したあと、中国海軍の軍港となった。2009年秋に一般外国人に解放される。

夏草や御霊うごめく爾靈山

ローソク型の天然要塞港で、日露戦争に際し、秋山直之の提案で、16隻の船を沈めて
閉鎖を企画したが、実際には余り役に立たなかったとも言われる。

旅順博物館 今年の春より開館される。日本の大谷光瑞探検隊が、1910年に発掘した
1300年前のトルファンのミイラや、中国歴代の青銅器、陶器、書画、彫刻を所蔵する。
ここで、陳列物を直売していたのには驚かされた。会員の一人が十数点をセットで購う。

旅順駅は、ロシア風の緑色の丸型屋根の瀟洒な建物で目を引いた。ここから、大連市に戻り、
黒石礁湾を臨む、星海公園・広場(旧星が浦海水浴場)を、最後に訪れる。天安門広場より
大きな東洋一の広場といわれ、周辺は高層高級マンションビル街に囲まれ広場には観光馬車や、
海に面して、大きな本を広げたようなデザインでデザインの広場もあり、騎馬姿の女警察、サーフィン、絵描
き像の彫刻、纏足のフットプリントなどがあり、市民が散策を愉しんでいた。

天天漁港 (海鮮料理)で夕食。ひらめの刺し身と生ういが最初に供されたが、皆恐る恐る食べた
が誰も腹下しをするものもいなかった。大連には、日本の戦前の食伝統が生きている。

第三日目 6月19日 8:00 朝食後、ホテルの目の前にある、大連駅まで、バスで移動し、8時の瀋陽向け、特急電車に乗る。4時間の乗車で、座席は確保されているが、旅行鞆の置き場がなく、通路に並べる。列車は満席であった。トイレは垂れ流しのため、駅を出る前後10分は使えない。車両は比較的清潔であった。何回か、掃除人がゴミを回収に来る。車内販売も、何回か来た。列車は四回停車。温泉のある湯崗子、大石橋、鞍山などに停車した。鞍山は、満州国の製鉄所のあった土地である

12:09 瀋陽 着 バスで移動して、新洪記餃子店で、瀋陽名物の餃子と中華料理で昼食。瀋陽からは、鄧鉄輝君に加え、地元の女性ガイドの韓輝さんとの二重ガイドとなる。韓さんは12年ほど九州の大学に留学したそうで、分りやすい日本語をしゃべる。この日は、**遼寧省博物館** を見学する。通常展示物の、青銅器、陶磁器、コイン、書画、仏像などの展示品も魅力的であったが、昨日から始まったばかりの特別展の『古蜀探秘—三星堆金沙遺跡出土文物精品展』が圧巻であった。三星堆遺跡は、紀元前2000年代の新石器時代・夏王朝・商王朝前期の四川省広漢市から発掘の、青銅器や玉器や目鼻に特徴のある仮面のような青銅器群像が楽しめた。1980年代に発掘され人気になった。また、金沙遺跡は、商代晩期から、西周にかけての時代の金、銀、銅、玉、石、陶磁器など、特に玉製品の玉璋や石像の石跪坐人像、石虎、金人面像など見ごたえがある。瀋陽商貿飯店(トレイダーズ・ホテル)に投宿。シャングリラ・系列ホテルで、設備もよい。夜は、ホテルのレストランで夕食をとる。

奉天の露地に売られしさくらんぼ

第四日目 6月20日 終日、瀋陽市内観光。開門から並んで入った

9:00 瀋陽故宮 は、清朝の最初の皇宮で太祖ヌルハチと息子の太宗皇太極(ホンタイジ)の二代の皇居。第三代皇帝の順治帝はここで即位した。300あまりの建物があり、満・漢・蒙古・チベット族などの文化芸術の折衷した建物様式が特徴。規模は北京故宮の12分の一。

はるげくも瀋陽故宮花石榴 テントゲルに似た、大政殿の八角堂、八旗(八旗は清のシンボル)亭、崇政殿、清寧宮、鳳凰楼。緑はモンゴルの草原の色、黄色は皇帝の色。1625年から1636年に完成。

張氏師府 張作霖・張学良親子と弟、張学銘、学思など東北地方を支配した軍閥の私邸・官邸。貨幣の発行権もあり、一時は東北三省と北京まで支配した。建物の高さも、故宮をまわったが皇帝並みの設備は許されなかった。

北陵 北陵は同じ年の1651年に完成した。東陵が初代皇帝ヌルハチとその母、皇后の陵墓で福陵と呼ばれるのに対し、二代目ホンタイジとその妻の御陵で、昭陵とも呼ばれる。参道には左右に石人と石獣の像が対称に並び後方に丸い裸山のような御陵があって、天辺に榆の木が一本植えられている。

秀江南 昼は秀江南で四川料理。初めて辛い料理に挑戦。麻婆豆腐のほか、海老、ゴマ団子、野菜スープ、キャベツ、魚(鱸)などが特徴。

午後、瀋陽特産品の玉、筆、石細工枕など売店で、思い思いに求めたあと、

9・18事変博物館 日めくりの形に、巨大な石像が建つ、1931年9月18日柳条湖で関東軍が鉄道を爆破して始まった、満州事変の記念博物館である。中国人には忘れない日だ。首謀者は板垣征四郎と石原莞爾とされ、これを契機として関東軍が長軍30万人に対し僅か1.6万人で満州全土を制圧できたのは、蒋介石の無抵抗主義の指示によると中国では言われている。

張作霖爆破事件の現場 1928年6月4日に、北伐軍に破れて、北京から奉天へ退去途中の張作霖は、日本軍により、列車を爆破されて死亡した。54歳だった。この事件で、田中義一内閣は天皇にとがめられて、総辞職するが、その後日本は愛新覚羅溥儀を元首にして、1932年満州国を建国宣言をし、翌年5月31日には塘沽協定で日中は停戦する。その記念の現場を視察する。

中山広場 大連と同様に、瀋陽にも中山広場の中心近くに、旧ヤマトホテル、現遼寧賓館があり、それを見学したあと、同館のレストランで夕食を摂る。趣のある部屋で、記念撮影。料理は、十数品の瀋陽郷土料理であった。

第五日目 6月21日 4:30 起床。ホテルを5時半にでて、バスの中で、弁当のサンドイッチ、ヨーグルト、桃などを食べる。

8:00 CZ-6503便(China Southern)にて、上海に飛ぶ。

10:15 上海浦東空港に到着。上海のガイドは、余雪亮氏。スルーガイドの鄧鉄輝君も同行。

12:00 上海市内の豫園に向かい、豫園の中の新緑波楼新館にて、昼食に点心料理。

13:00 豫園・豫園商城 豫園は16世紀、明の時代に四川省の役人をしていた潘允端が、両親のために造った庭園で、1559年から77年まで18年を掛けて造営された。塩の専売で財を成したといわれる。戦後の1956年に大改修して、2万㎡の面積。中心の湖心亭は、上海最古の銘茶館と知られる。半分は豫園商城として、商業地域で、みやげ物や、お茶、漢方薬などの店や上海料理屋がひしめく。上海の浅草の風情。店屋、民家の窓から下着などの洗濯物が、見える、中国に来てはじめての光景である。

SWFC(Shanghai World Financial Centre) 上海森ビル100階展望台より、上海の眺望をえる。20年前までは、一面の野菜畑だった浦東地区がNYの摩天楼もさながらに変貌した。発展躍進する中国の象徴を見る如くで、感慨を新たにす。

このあと、上海博物館に赴いたが、入館制限時間に9分遅れ、他日を期し、上海の中央を流れる黄浦江に添う、上海市民の憩いの場、外灘を散策し、黄浦江を行き交う船の眺め、その対岸の浦東の魔天ビル街と、昔、英仏日米などの上海租界のあった旧市街の双方を眺めながら、それぞれに古今・懐旧の思いに浸る。

上海3日間の宿所は、パークホテル(国際飯店)であった。この夜は、ホテル近くの、築90年の由緒あるレストラン 鮮囂房 にて会食する玄関に茶経の著者、陸羽の像があった。

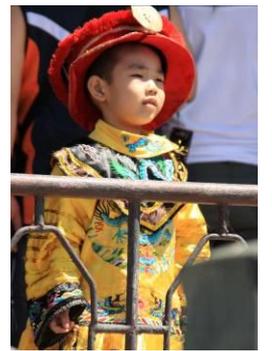
- 第六日目 6月22日
- 8:20 ホテルを上海万博会場の開門09:00に着くように、出発。最近は、一日50万人が殺到し、入り口の手荷物検査で、時間がかかるというので、塚本さんの待つ日本館には、10:20を目標にしていたが、幸い10:00頃までには辿り着いた。
- 10:20 **日本館** へ入館し見学する。特別配慮の入館で恐縮する。日本の文化の紹介パネルや茶室、今回の上海万博のテーマの、Better City Better Life『和諧都市』に沿ってバイオリンを弾く、ロボットと会場の人びととの対話や、トキの羽を廻って、エコな
- 万博の夢のいざなひ合歓の花** 生活を志向する物語を、一人乗りエコ・カーを使って展開するショーや絶滅危惧種のトキを、中国から貰って、日本で人工飼育で増やしなが、野生化をするまでの、日中研究者の交流を、能とオペラ仕立てで演出した短いショーが日本館の売り物。
- 日本館を終えると会場内で、各自で自由に昼食を摂りながら、並んで入れるpavilionにそれぞれに
- 14:00 挑戦し、14:00に予約してあり、**中国館** に入る。中国館は、万博終了後も、継続して中国人のために残すので、期間中の中国人の入館は、少数に制限し外国人を優先すること。中国の発展を印象付ける映像を鑑賞した後、中国の歴代の歴史絵図のパネルを眺めながら、兵馬俑から出土の、国宝級の4頭建馬車の貴人像を見て、未来都市、未来生活のセクション、子供たちが描く未来都市の絵画パネル、そして、最後は、トロッコ電車に乗っての、館内一周の幻想の映像都市を巡って、エコカーの陳列と蓮の花園から出口へ。
- 次の約束の、ドイツ館までの、道のりは30分近く掛かった。会場内の電気乗り合いカーは、終点までで、途中下車がきかず、使えないのは不便である。
- 16:00 **ドイツ館** へ入館する。ガイドは日系の若い男性、児玉君で、塚本ご夫妻が同伴してくれる。和諧都市がドイツ館のテーマ。ケルン市の緑化政策。ハンブルグ港を港灣都市化。自立するペンギンロボット。動作で作動する太陽発電芸術公園。本に耳を近づけるとその本の解説してくれるデジタル本。免許証を翳すと、全てに対応するスマート・カー
- 宴果てて見上げ明珠と夏の月** など、ドイツらしい堅実で、生活に即した展示と、ドイツの未来技術の展望がみられた。夜は中国旅行の初日から中華料理続きだったので、日本料理の柚子本店で、塚本ご夫妻を交え、久々の和食を楽しむ。
- 第七日目 6月23日
- 8:15 自由行動の一日。内地で仕事のある石垣氏は一日早く帰国。三原氏は、万博見学。大森氏は黄浦江の川下りへ。残る11名は杭州一日観光に行く。
- 12:00 **西湖** 3時間高速道路をバスでひたすら走って西湖に着くが、11時の遊覧船に間に合わず昼の便に乗る。杭州は南宋時代の首都で、森と湖の古都である。マルコポーロは、世界で一番美しいと讃し、〈天に天堂あり、地に蘇杭あり〉と蘇州と共に謳われた。
- まほろばの西湖が柳さつき風** 西湖は、古来より傾城の美女・西施にもたとえられ、景勝の保養地である。森と湖と運河の美しい街である。遅めの昼食を、杭州市内でとり、銭塘江沿いの
- 14:00 **六和塔** は銭塘江の黄色い濁流のような流れを見ながら、時間の関係で遠くから眺める。銭塘江は8月19日の十五夜の日に、15キロ先の東シナ海からの海嘯という、アマゾン河のポロロッカのように逆流し氾濫したので、洪水防止の祈願のために有志で建てられたものといわれる。ついで、杭州呉山の麓にある、歴史商業地区、清河坊こと南宋の古都・杭州にも紫禁城が建てられ、この河坊街は商業・貿易の地として栄えた。
- 老鷺や西施が湖に舟出せば** 2004年より、歴史地区として保存を始めた。古くからの建物を中心に、今回の旅行で接した、もっとも昔の中国人街とその雰囲気濃厚に残した、日本で言えば、浅草の仲見世商店街を思わず趣のある場所である。時間が充分であれば、楽しめる場所。多少の未練を残しながら後にした。後は一路、再び、上海を目指す。途中、高速道路沿いの町々には、瀟洒な、丸やとんがり帽子の屋根を持つ、4-5階建ての新興住宅が、軒並みに建てられているのが、中国の地方の発展を示していたように思う。
- 1540 **河坊街** 夜は、今回の中国旅行の最後を祝し、杭州観光に参加しなかった方も合流して上海の乾隆美会で、最後の晚餐をとり、終わって有志で夜の外灘まで、30分の道のりを往復して、外灘の夜景と上海の夜の情緒を十分に楽しんだ。
- 七曲りして風の道蓮見舟**
- 新茶酌む宋が仲見世河坊街**
- 第八日目 6月24日
- 8:30 最後の日、ホテルをチェック・アウトして、バスで、空港への途次、上海に着いた日に、見残した**上海博物館** を一時間半ばかり鑑賞する。今回、旅順博物館、瀋陽の遼寧省博物館、そして、上海博物館と三つの博物館を見た。それぞれに特徴があり面白かったが、この上海博物館も、時間があつたらもっとゆっくりみたいような中国の歴史が凝縮された御物が一杯あつた。青銅器、貨幣、書画、仏像とそれぞれに見所があり、各人の好みで楽しんだことと思う。
- 上海は天がける街朴の花**
- 13:10 上海発NH-920便で、成田への帰途に着く。
- 17:00 成田着 17:30ごろ解散しそれぞれの家路につく。参加者全員が、一人のけが人も、腹下しもな無事に帰国できたことは、何よりであった。

(編集部作成)

目次

1.	中国・歴史と上海万博の旅 日程表	編集部	
2.	中国・歴史と上海万博の旅	泉 三郎	1
3.	中国旅行記	山田哲司	5
4.	オヤジ責めるな行く道じゃ、子供叱るな来た道じゃ	石垣禎信	7
5.	中国への期待	小坂田國雄	9
6.	中国・歴史と上海万博の旅の印象	高倉宣夫	10
7.	歌で読む 中国の旅	西脇美都絵	11
8.	鄧鉄輝君からの手紙	鄧 鉄輝	14
9.	上海での岩倉使節団の足跡を追って	三原 浩	15
10.	中国東北紀行と上海万博の旅に寄せて	大森東亜	19
11.	旅順博物館蔵宝物購入顛末報告書	梶 春治	23
12.	中国の歴史に触れて	古俣美樹	25
13.	中国への旅	永島脩一郎	27
14.	中国旅行断想	小野博正	28
15.	〔特別寄稿〕上海万博ツアー雑感	岩崎洋三	35

【編集責任： 小野博正】 【写真提供：三原 浩、古俣美樹、小野博正】





<いい旅だった>

今回の旅も、とても充実した、楽しい、いい旅だった。それにはいくつかの原因が考えられるが、まず第一に、お仲間がいいことだったと思う。それは「米欧亜回覧の会」ならでのことで、気心が知れているメンバーに初参加の人も直ぐ馴染んでくれて、多士済々の楽しい旅になった。それにテーマがはっきりしていて関心の在処も共通しており、その見聞や感想を互いにしゃべりながら、いわば複眼で見れる旅だったことが、本会のツアーのいいところである。

第二にはガイドがよかったことである。とくに大連から上海まで全行程に随行してくれたテッチャンこと鄧鉄輝氏によるところ大だ。流暢な日本語、該博な歴史知識、そのうえ気配りが行き届き、臨機応変の処置もよかった。

第三には 万国博における塚本弘氏の配慮による。氏のお陰で、VIP 待遇で日本館、中国館、ドイツ館を参観できたのは幸いだった。また、その夜、塚本夫妻も一緒に「柚子」なる日本料理屋で会食できたのもよかった。万国博開催の舞台裏、中国側の対応など塚本氏ならではの話が聞けたのも貴重だった。

なお、知的で心優しい女性が四人も参加してくれたのも有り難かった。やはり彩りがあり花がありおのずから雰囲気や和やかになった。野郎ばかりだったらと殺伐たる風景？を想像し、そのこまやかなところ遣いも含めて、あらためてお礼を申し上げたい。

そして、旅の充実は、出発前から旅行の幹事役を引き受けて、万事にそつなく準備や連絡に気を配り、文集の編集まで差配してくれた小野ちゃんこと博正氏によるところ大である。同行の仲間と共に、そのご尽力にこころから感謝したい。

<とにかく驚いた！>

さて、今回の旅は、見るもの、聴くもの、食べるもの、質量共に十分で、いふなれば「眼福・耳福・口福の旅」だった。それだけに「満貫料理？」をいただいたような満腹感がある。これを消化するにはまだ相当な時間がかかりそうなので、とりあえずの印象だけを記しておきたい。

これまで私は中国に三回行っている。しかし、東北地方は初めてだし、上海も十四年も前のことで様変わりをしている。全体的印象としては「とにかく驚いた」の一語につきる。

第一に、すべてスケールが大きい。空港が大きい、公園、広場が大きい、道路幅が広い、

高層建築の林立ぶりも森のように建つ。人が多い、どこも人、人、人である。大都市の人口、上海2200万人、瀋陽750万人、大連270万人。一億を超える省がいくつもある。人口が13億とも14億ともいうスケール、面積は25倍という広大さ、大連、旅順、瀋陽、上海、杭州と旅して、それをひしひしと実感した。

第二に、開発ラッシュ。都市の建築はむろん、郊外にのびる道路、鉄道、地下鉄などのインフラ、いたるところクレーンが目に入る。これが全土で行われているとすれば、そのすさまじさが想像できる。不動産バブルともいわれるが、その泡立ちの中を歩いてきた感じだ。

第三に、その開発・建築のスピードが早いことだ。一党独裁で土地収容が出来るので、決定から実施までが早い。わずか十数年の間にすっかり景観が変わるほどのスピード、上海はニューヨークを超えるほどだというが、かつてのシンガポール、香港が中国本土のあちこちにニョキニョキ出来上がっていく感じだ。大連の星海にあるアジアという広場はかつてゴミ処理場だったという。そこが見事に変身して広々とした民の憩い場になり、周囲に高層マンションが並び立つのは偉観である。

第四に、それらが意外にも、美的で、清潔であることだ。かつての粗雑な建築、穢い、不潔なイメージという感じが消えている。上海のビル、各地の高層マンション、なかなかデザインがよろしい。公園、広場なども、樹を植え、花をあしらい、しかもゴミを余り見ない、掃除が行き届いている。かつては共産主義国家「ソ連」の影響が大きかったせいか、バカでかいだけの、殺風景で機能的なだけの建物が目立ったが、都市の景観は変身して、ファッショナブルな建築がふえている。

第五に、歴史の深み、時間軸のスケールだ。それは各地で博物館を見たせいもあるが、四千年、五千年の歴史を持つことの凄さを感じる。その歴史の厚みが旅していても随所に感じられる。上海や大連はここ百数十年の新しい都市だが、瀋陽や杭州となるとさすがに歴史が古く、世界遺産の故宮や西湖のほとりを歩けば、その歴史の厚みが自ずから伝わってくる。近代の百年、二百年が、縮んでいくような感触があった。

第六に、世界の高級ブランドの看板と店舗が目立ったことである。それはむろん大都市の目抜き通りのことだが、時計、自動車、服飾、化粧品など、オーバーに言えばまるで銀座のブランド通りと見間違ふような光景で、それだけ高所得のお客がいることを示している。

一方、大連の駅から吐き出されて来る客の貧相なことは戦争直後の上野駅を連想させるものがあった。都市の貧民街や地方は見てないが、伝えられる格差がどのような規模で広がっているのか、その不満がどのようなマグマになっているかは想像する他はない。貧富の格差問題は、非常に大きいのだろうとあらためて思う。

第七に、若い娘のファッションがもはや日本と変わらないこと。ホットパンツが大流行してすんなりとのびた脚が美しい。携帯でしゃべりながら颯爽と歩いている姿は、東京と変わりなく楽しげだ。

第八に、デパートの子供服売場、ワンフロアを占めて華やかなのに驚いた。4・2・1という言葉があるが、一人っ子政策が徹底して、祖父母四人と親二人にかしずかれた皇太子、皇女たちが増え、それが大きな市場を形成しているらしい。結婚式や新婚旅行のエージェントが街中に目立つのも、一人っ子に起因しているのだろう。この政策はもう三〇年も続

いているというから、その世代が結婚適齢期に達したことを物語る。今後、この恵まれた環境に育った坊ちゃん嬢ちゃんが、社会の主体になっていくのだろうが、そのとき中国社会はどのように変貌するのか注目に値する。日本以上に少子高齢化現象が急速に大規模に起きてくるのだろう。

第九に、日本との関係で、日清、日露、大東亜戦争のことだ。遼東半島のロケイション、満州の大地、関東軍、満鉄、それらが何を意味し、そこで何が行われてきたのか。満州国の短い歴史も含め現地に立ってみると、実感を以て理解できる。やはり旅の効用は大きい。

< 日本が小さく見える >

これらを総括すれば、中国がいかに大きいかということで、それだけ日本が小さく見えてくる。面積だけなら、アメリカやロシア、ブラジルやオーストラリアもすごい。しかし、人口については中国が抜群だ。それに経済力がついてきたのだから、そのパワーはすさまじい。そのうえ歴史と文化の蓄積があるから、その点からしても中国の凄さが際だつ。かつての高度経済成長期の日本が十個くらい束になって驀進しているという感じだ。

そのうえ、博物館や公園などの施設をはじめ、文化、美術、憩い、遊びの部分が、総じて清潔で美的になった。これは、統治がよく成されていることの証左であり、余裕の表れとみえた。それは、万博における中国館の展示にも見えることで、その巨大なジオラマ？「清明上河図」（久米の「米欧回覧実記」ヴェニスに引用あり）のスケールは感嘆に値する。これは宋代の首都「開封」をモデルに画かれたものだが、それを最新の技術と組み合わせてみせる、歴史の厚みと美的な感性が結びついて、とてもどの国もかなわないスケールだと思った。

中国はいま、世界中の資金と人材と技術を駆使して、新しい中国をつくりあげている。そのシンボルが上海だが、そこには世界の最先端の技術とデザインが流れ込んでいる。眠れる獅子が日本に三、四十年遅れて「西洋的近代化」を遂げ、変身している姿がここにある。明治の文明開化と戦後の経済成長を一度にやっている感じさえした。

日本から見ればこれは後追いである。いつか来た道であり羨むほどのことはないともいえる。が、そのスケールの凄さとスピードの速さには驚く。そして、あらためて西洋近代文明の魅力とその伝播力の凄さに感嘆せざるをえなかった。その勢いは旧共産圏や後発地域に流れ込み、いまやとめることはできないという印象である。それは中国以外の国々にも共通していることであり、既に先進国入りし成熟した国家をのぞいては、西洋的近代化はまだまだ憧られの対象であり、当分はこの流れがグローバルに進行するのだろうということを実感させた。

それにつけても思うのは、一党独裁政治の効率の良さだ。それは明治初年の有志専制にも通じることで、トップさえ有能であれば専制政治の方が効率がよいことは目に見えている。それは万国博の運営会議を束ねる議長役の塚本弘氏の話からもうかがえた。問題が起きても上海市長と党書記のツートップに直ぐ会うことが出来、そこで話が付けば即実行で事の解決は早いとのこと。政治の効率からして民主主義なるシステムがいかに不効率か、またポピュリズムと衆愚政治の怖れがあるかを、日本の現状に照らして否応なしに実感させられた。そして今の中国は、幾多の問題を抱えながらも、現指導者は概して良質であり、

よくやっているという印象をうけた。

このショックで、日本が総じて小さく見えてしまうのは実感だけれど、かといって過小に評価することはないと思う。過大でもなく過小でもない、等身大の日本をよく診ることがいかに肝要かとおつくづく思った。

<裏も表も、等身大の中国を見なければ・・・>

それは中国についても同じ事で、今回、僅かの期間、大都市を四つ、早足で回覧しただけでは、診断も自ずから偏るだろう。もっと現実の等身大の中国の姿を見なければならぬ。現実にはいろいろの問題が背後にあり、マイナス面、不穏不満のマグマが鬱屈して、いつどこで噴出するかも知れないと思うべきだろう。

よくいわれることだけど、問題点をすこし列举してみよう。

一 各地で暴動が起きていること、情報統制が行われているので実情はよくわからないが、不満分子が少なくないということは事実だろう。

二 その原因の第一は、貧富の格差に違いない。それは大都市の中もそうだし、地方との格差も問題だ。とりわけ土地成金、その所得税の問題など、整備が不備である

三 個人の自由、報道の自由、発言の自由が制限されていること、一党独裁への不満、それがマグマのように蓄積されていること、

四 少数民族問題、チベットをはじめ西域のイスラム地域にこの問題は多い。

五 官僚の腐敗、汚職、賄賂の横行、モラルの問題。

六 「一人っ子政策」の問題、甘かされて育った世代が、あと十年もすると社会の中樞を担うようになる、それが大問題。少子高齢化問題も先鋭的に現れてくる怖れが十分に予測できる

七 不動産バブル、拝金主義、欲望主義、アメリカ的な個人主義が蔓延して、家庭が崩壊し、自己中心主義者がふえている。モラルの低下など、日本に似た社会現象が生じている。

八 軍事費の増大、軍事大国への不安、北朝鮮をどう扱うのか、その意図は何か。

九 中国元の跳梁、対外投資、資源確保の問題、環境対策の遅れ

十 知的所有権の侵害など

しかし、中国が打ち出している「和諧社会」という目標は共感できる。万博のキャッチフレーズである「BETTER CITY、BETTER LIFE」もいいと思う。こうしたグローバルに共有できる価値を目指して、我々日本人も共に新しい地球文明を創っていく気概をもちたいと思う。

久米邦武は「米欧回覧実記」でいっている。「世界ノ真形ヲ瞭知シ、的実ニ深察スヘシ」と。とにかく、遅ればせながら「もう少し学ばなければ・・・」というのが目下の思いである。

中国旅行記

山田哲司



前回中国を訪問したのは1997年9月のことであった。その後の13年で、中国は大きく変容した。ことに上海には驚いた。まるでニューヨークだ。いやそれ以上かもしれない。万博による集中投資が若干バブル気味に利いているようにも思われる。上海をはじめとする中国の発展については別途論じることとして、今般は、今回の旅で見聞き、直接肌で感じたことをテーマに、改めて考えさせられた点、感じた点を整理してみたい。

1. 中国人の懐の深さについて

今回の旅で最も考えさせられたことの一つである。初日の大連で、大和ホテル、満鉄本社、旧横浜正金銀行支店の建物、ほか多くの建造物がそのままの形で維持・使用されているのを見たのは驚きであった。幾多の王朝の変遷を見てきた中国人にとって、日本人の支配時代は、ほんの一瞬のこと、良いものはそのまま生

かして使うということなのだろうか。満鉄本社前の石碑の記述も、事実を淡々と記しているに過ぎない。

他方、瀋陽の9・18歴史博物館で見た江沢民の「忘れる勿れ」の大文字のように、満州事変の勃発を強く弾劾するモニュメントも存在する。日露戦争での中国側の犠牲者数を鄧さんに確認したのは、水師衛の会見場の写真展示の中の1枚が気になった故であった。住民を処刑していると見られる光景を写したもので、戦場となった地域の中国住民の犠牲者は、統計が不備だが、日露両国それぞれの戦死者数とほぼ同数と推定されるとの説明であった。また、旧大和ホテルの入り口正面、日中友好に力を尽した郭沫若の扁額のある部屋の前で、郭沫若の評価などを鄧さんに聞いたが、はっきりした回答はなかった。日中両国の歴史に詳しく、抑制の効いた説明に終始していた鄧さんにしてなお、説明しにくいことが多いのだろう。

「新しい中国 古い大国」(佐藤一郎著、文春新書、2007年)に、「明哲保身」(詩経)という言葉を引き、老舎が自らの子供たちを理科系に進ませて政治の世界から距離をおいたことが記述されている。一方に偏らず、長い時間軸の中で自らの言動に留意して生き延びてきた中国の民衆を見ると、その身の処し方に、幾世代を超えて逞しく、懐深く、生き抜く人生の知恵が生きていると言えそうである。共産党支配の中国が成立してまだ60年、中国人民にとって歴史の流れの中では、東の間のことなのかもしれない。ましてや文化大革命などは、批判・

評価の対象にするには時間の経過が不足しているのだろう。

2. 中国に見る種々の格差について

中国における格差は例えば、所得格差による生活水準、職業選択の機会、党と一般人民の関係、地域格差、など様々な要素・視点が考えられ、それぞれが検討・考慮に値するが、我々が垣間見たものは、そのごく一部に過ぎない。瀋陽へ向かう列車や、杭州へのバス旅行の車窓から見た農村風景は、住居も農地もよく整備され、安定した、豊かな生活ぶりが見て取れたが、奥地に展開される農村の状況は、こんなものではなかろう。上海や、大連、瀋陽で見た高層アパート群と、古い町並みが残る旧市街、緑滴る杭州西湖の古い中国らしい風光は確かに美しいが、近代的な建物が遠望され、また年に数日しか使われなかった毛沢東の別邸が多数の兵士に警備されて現存するなど新旧中国のアンバランスが随所に存在する。土地の所有権がない中国でその使用権が切れる数十年先にどのような改革が待っているのか、農地の使用権はどうなるのか、私的財産の相続はどうなるのか、今後解決を迫られる問題は山積しているように思われた。

3. 中国の多様性・多面性について

上海の博物館で見た多様な民俗衣装は、そのまま民族の多様性を語るものだ。共和国としての纏りを、いかに判断し、理解するか。多民族国家の問題は、チベットだけにとどまらないだろう。人間の多様性もまた考えさせられる問題だ。一部の事業成功者たちの拝金主義、一党独裁による官僚主義と古い体質そ

のものの増収賄事例、にもかかわらず大人の風格が漂う優秀な多数の人材。一般市民の中にも、鄧さんのようにバランス感覚の優れた人物がいて、市民ベースの交流が出来ること、などなど。日常生活の中ではマナーやエチケットに驚かされたこともあった。行列の無視、食事習慣の違いなど、この様なことに共通のルールがあるわけではないが、多様性の中にも、ある一定の、国際的に共通して持たねばならない規範があり、それを学ぶこともまた必要なのであろう。かつて日本人が経験したように。

しかしながら、これだけの多様性を一つにまとめて行くのは、至難の業である。日本の十倍の人口を有し、多様・多彩な人材も多いことであろう。その国民を束ねることが一党支配で可能なのか、また、一党独裁だからこそ可能なのか、共和国存続の意味・目的などを改めて考えさせられた。

4. 中国の歴史の深さと日中交流について

上海博物館でみたおびただしい数の青銅器の陳列は、中国の歴史の深さを考えさせるものだった。日本がまだ狩猟生活をしていた時代に、この様な高い文化があったこと、その数と種類の多さには瞠目した。各地の博物館で見た、多数の貨幣の収蔵品なども歴史の奥行きを語るものだ。中国の博物館はどこも整備が進み、文化遺産に対する取り組みが重視されているよう見受けられた。しかしながらこの様な膨大・多様なコレクションはいかにして可能となったのか。「上海の長い夜」(チェン・

ニエン著、1988年、原書房)が明かす、文革時、紅衛兵に略奪され古磁器が後に上海博物館に寄贈されるにいたる経緯などを思うと、世界の各地の博物館コレクション成立の過程とダブらせながら、博物館とは誰のものかを考えざるを得ない。遼寧省博物館にあるべき清朝時代のコレクションの三分の一は台北に、三分の一は北京にあるという鄧さんの説明が思い出される。

日中間交流の歴史は長いが、ここ百数十年は、お互い相手を理解することの少ない状態が続いていた。われわれの帰国後、中国人の日本渡航ビザ発給が富裕層から中間層にまで拡大され、日本への観光旅行が急増する見通しであるとの報道がなされている。中国側の日本理解が庶民層にまで広がるのが期待される。一方、我々の側にも、今回の旅は昨年暮れに旅順港地区が観光目的に開放されたことが一つの契機となった事情があった。我々の中国への知見は、遣唐使の昔から、歴史書や文学を通して多くの蓄積があるものの、現代中国の実態についてはあまり理解

が進んでいない。今世紀に入り相互間の情報量は急速に質量とも増加しつつあるが、庶民ベースでの旅行、留学生の交換、文化交流、など人的交流による相互理解が、なお一層進展することが望まれる。

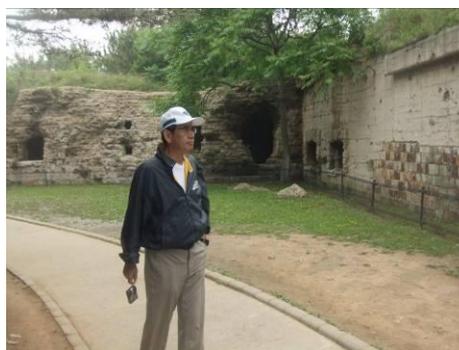
今回旅行してみて、改めて漢字を使う共通の文化の有難さを思った。看板や案内の文字が簡体文字に慣れるにつれてある程度判るようになったのは、興味深いことだった。日中間には共有できる基盤は多いはずである。今回の旅行が中国に対する新たな興味と関心をもたらしてくれたことは、大きな収穫であった。

「旅は道連れ」というが、今回もまたよき仲間恵まれ、楽しい8日間を過ごすことが出来た。思い出のエピソードは尽きないが、それらは各地での印象深い光景と共に心の中に刻んでおこう。改めて、ルームメイトであった永島さんをはじめ総ての方々に厚く御礼を申し上げます。(完)

オヤジ責めるな行く道じゃ、
子供叱るな来た道じゃ

石垣 禎信

大連、瀋陽、上海を巡った今回の旅は歴史の旅であり文明の旅でもありました。ご一緒した仲間の皆様が深い考察をご披露されると思いますので、たった八日間の短い訪問ではありますが、僭越至極ながらも



私が感じた「中国人の行動とマナー」の話をしたいと思います。

ちょうど40年前、私は大阪万博のIB

M館で約4ヶ月働いていました。今から考えると一日3～4回のデモとプレゼンテーションでお客様に喜んでいただき、あとは万博を満喫することが仕事のような、今思うと夢のような時間でした。日本の経済発展の象徴のようなイベントで、6500万人超の来場者を集め会場はごった返していました。

一番の目玉はアメリカ館の「月の石」で、入場門からの「われ先のダッシュ」の映像がよくニュースに取り上げられていました。物凄い好奇心とエネルギーで、会場内の様子は上海万博の雰囲気と良く似ていました。今回幸運にも上海万博にも来ることが出来て、「あれからもう40年か・・・」と珍しく自分の人生を思い返したりもしました。たまたま私の父親が終戦前まで商社の上海駐在員で、生まれる前の上海の話や写真を思い出したりして、何かと感慨の深い上海でした。

皆様も感じられたことと思いますが、現在の中国人の「行動とマナー」はよく言えば積極的かつストレート、悪く言えば傍若無人、利己的かつ無礼であることを体感しました。たとえば、エレベーターは降りる前に乗り込んでくる、もちろん前を空けて待つとか、ドアを押さえるような行動は殆どありません。ブッフエスタイルの朝食の列も、早い者勝ちで割り込み御免の行動パターンです。「どうぞ」と譲ってあげても「サンキュー」も「謝々」もありません。ただただ熱気と活力に感心(寒心?)、反面「若さとダイナミズムの表現」と見れば、魅力(?)とも感じられますが・・・。

日本の40年前を振り返るとどうだったのでしょうか? もともと内向きには礼儀正

しい国民でありましたが、電車の乗り降りをはじめ、マナーは決して褒められたものではありませんでした。海外旅行(特に団体での)の行動やマナーが他の国(主に米欧)から責められたのは、ほんの20～30年前のことでした。私もビジネスや観光での米欧滞在時に、食事やエレベーターでの現地の人々の自然かつ余裕のある「行動とマナー」に感心し、早く自分も日本もこうなりたと思ったものです。

綾小路きみまろの決まり文句ではありませんが、あれから40年! 日本も豊かになりました。世界のリーダーの一員にもなりました。「行動とマナー」は、いまや世界の中で有数のレベルだと確信しています。「衣食足りて礼節を知る」とはよく言ったものです。ただ残念ながら、「衣食足りすぎて活力を失くす」状態になっているのも事実です。

「オヤジ責めるな行く道じゃ、子供叱るな来た道じゃ」は、私が40代後半にある本の中で見つけた言葉です。名前は忘れましたが、お坊さんの言葉だと思います。70代の自分のオヤジの老化現象を責める自分や、部下(時には上司も)やお客様に説教する当時の自分には、ドキッとさせられ且つガツンときた言葉でした。

今の中国に、「今や世界のリーダーの一員なのだから、このマナーの酷さを何とかしなさい」とは言いません。言っても無駄ですし、実はリーダーたちは既に知っています。世界との関わり合いの中で必ず感じているはずです。これは時間と周囲の問題です。どのように変化するか引き続き興味深く観察したいと思います。機会があれば周囲の問題として、個人的にもその変化にか

かわりたいと思っています。

日本は中国のオヤジではありませんが、中国にも日本への批判だけではなく、文化・文明の良さも変化も認めて「オヤジ責

めるな行く道じゃ」と余裕を持って日本と付き合ってもらえれば、きっと日中両国の文化・文明の進化に繋がるとしています。謝々。(完)

中国への期待 —経済分野の改革解放から政治・社会・文化・環境分野の改革解放への重点のシフト—

小坂田 國雄 (おさかだ くにを)

狂乱の文化大革命の後、中国は国家目標を経済の改革解放に定め、著しい経済発展を遂げている。今回5年ぶりに上海その他地域を訪ねて、改めてその発展ぶりを実感した。

環境改革

しかし、我々が旅した各都市はスモッグに覆われ、瀋陽で短時間しか青空をみることが出来なかった。日本でも、かつては、京浜工業地帯、阪神工業地帯等はスモッグに覆われ、悪臭さえも漂っていた。中国は、国として一日も早く環境悪化の深刻さを理解し、大気汚染防止ばかりでなく、用水排水の適正処理、固形廃棄物の適正処理またその他の環境問題に積極的に取り組んで欲しい。何年か前に、日本の高度水処理システムを中国に紹介しに行ったが、そのときは関心はまだまだ低かった。



政治改革

広大な地域と多種多様な民族を束ねていくには、一党支配体制が今は現実的なのかも分からない。しかし、長期的に観ると、複数政党による、政権交代が可能な議会制民主主義体制のほうが、より健全で、安定した政治を行えるのではないだろうか。政治分野での改革解放が期待される。

社会・文化改革

社会・文化面では、インターネットの普及で改革解放されつつあるが、規制がまだまだ残っており、自由な報道、国家の干渉が少ないメディアの普及が望まれる。多種多様な人々がそれぞれ勝手な活動を行うと、中国の場合は、国としてまとまりが欠けてしまう恐れが未だにあるように思う。しかし、社会・文化面での改革解放が、結局は中国をより健全にし、強くするとおもう。

日本の改革

ここまで、中国について批判めいたことを述べてきたが、日本でも、まだまだあらゆる分野での改革解放が望まれる。そして、日本も中国もなお一層相互理解を深めていかねばならない。米欧亜回覧の会として、中国も含めた米欧亜との国際交流をもっと盛んに行えないかなと思う。(完)

中国・歴史と上海万博の旅の印象

高倉宣夫



1. 米欧亜回覧の会の海外旅行に、今回初めて参加して、大いに有意義な旅でした。
2. 最初の訪問地、大連に到着して、旧大和旅館（ヤマトホテル）、現在の大連賓館に到着して、昔そのままの姿で営業をしているのを見て、大変に驚きました。すべてを破壊して日本の痕跡を消し去ろうとする韓国と大いに違いました。他の都市の瀋陽や長春の旧大和旅館も現存しているのですね。
3. 旧満鉄本社ビルや満鉄病院もそのまま政府関連庁舎として使用しているのを見て、中国人の度量の大きさを感じました。
4. 次の日の旅順を観光して、東鶏冠山や203高地、水師營の復元等から日露戦争の戦跡を観光資源として整備している様子を知りました。当時の清は中立の立場でこの戦争を捉えており、日露戦争に関心のある人にとっては、大いに興味をそそられることです。旅順地

区は昨年の秋から観光客が解禁されたところなのでお勧めのスポットです。

5. 次の視察地、瀋陽では瀋陽故宮や張氏の邸宅を見て、満州の歴史についていろいろと考えさせられました。金王朝から清王朝への転換や、軍閥の張作霖が皇帝並みの栄華を築いていたことや、張学良が新中国の成立に貢献したとの評価等も得ていること等。
6. 関東軍による張作霖の爆殺現場の確認や北陵公園にある清朝初期の皇帝陵墓も歴史に関心の有る者にとって興味深いスポットです。
7. 最後の上海は、霧が常にかかった状態で、大都市に住む住人は生活環境が悪いなど感じました。高速道路における車の渋滞も恒常的であるようです。
8. 上海万博は、政府代表の塚本弘氏のご好意でVIPルートを通して日本館、中国館、ドイツ館の三館を待たずに入場できたことは大きな旅行のメリットでありました。愛知万博を大きく上回るスケールの会場は会期中に1億人の入場者を迎えることになるのでしょうか。
9. オプションの杭州見学は、高速道路で片道約3時間半走るといふ強行日程であったがまた訪れてみたいという風情が感じられました。旅行に同行した皆さんは素晴らしい人たちばかりでした。謝々。



(機上にて)

雪抱く 北アルプスの 連山は 機上の下で 美しく映ゆ

(大連にて)



連風は 空の果てまで あやつられ 竜の様して 天に昇るや
満鉄の施設に投じた 血と汗は 幹線として 今も健在
大連の婦人警官 颯爽と 巧みに整理 街の華なり
星が浦 海まで続く 足型は 人民パワーの 証なるかな
かつての日 夫の泊まりし 大和ホテル 遺影と共に 晚餐をなす

(旅順にて)



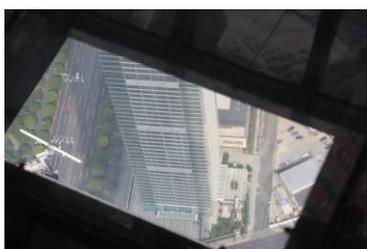
幼き日の 居住区訪ねる 友人の 後に続いて 思い同じに
水師営 重要会談 会見場 百年のちも 跡をとどめて
一步づつ 踏みしめ登る 爾靈山 激戦跡は 緑の深く
爾靈山 坂を降りつつ 友人と 詩を吟じては 鎮魂となす
日露戦 要塞跡も そのままに 果てし命の はかなさ響く
釈迦無尼仏 うつむきかげんに 笑み浮かべ 来世の悦楽 思わず坐像

(瀋陽にて)



巨大白 目かくしの驢馬 粉をひき 廻る運命に 思い馳せたり
昭陵公園 敷きつめられた 歩道石 黄金の煌めき 栄華を伝う
皇姑屯の 爆破の線路 今轟と 音する横を 通り抜けゆく
旧跡を 辿りてゆけば 碑のありて 過去の歴史は 今も消えざり
木の陰で 座りて向かい 床机する 老人達の 顔はおだやか
交叉する 鉄路は今も 人運び 歴史残れり 柳条湖事件

(上海にて)



槐の樹を 傘ともなして 寛ぎて 生を楽しむ かつての園主
人いきれと 食の匂いが 入り混じる 豫園仲店 パワーの満ちて
森ビルを 登りつめれば ガラス張り 階下は透けて 揺らぐ足もと
南山街 ポプラ並木を 過ぎ行けば 幼稚園児の 声生き生きと
茗香園の 茶を溶れくれる 手捌きの 技しなやかに 疲れも忘る
^{クレーン} 娘の 足はすらりと 軽やかに 街も時代も 活歩 活歩

(上海万博にて)



中国館 子供らの絵は 夢あふれ 未来を創る 希望の光

バランスを 最優先に採り入れた ドイツの街の 新しき形
ざわめきを 集めて創る エネルギー 身の内ひそむ パワー発見
ロボットの 奏でる楽に 耳澄ませ しばしひととき 変革実感

(杭州にて)



ドローリー 三角傘を かぶる農民 作物を 山高く積み 悠然と行く
ゆったりと 流れる時間を 楽しみて イルカのような 散策の人
樹の下に 立ちし花嫁 微笑する 幸せ写す 太子湾公園
蘇東波の 大き立像 泰然と 今の中国 何と詠うや

(再び上海にて)

釈迦石仏 目を伏せ愁い 含みおり 人の苦しみ 共に分ちて
広大な 草原偲ぶ 民族衣装 恵みのみどり 讃えるごとき
高層の ビルと並びし おぼろ月 上海の夜は 一服の絵に
晚餐の 窓に展ける 煌めきを 眼に刻みつつ 会話楽しむ
古きより 魔都と称ばれし 上海は 果てなき力 歴史の予感
歴史とは 種々な角度の 見方ありと 理解の深き 添乗員は
人混みを かきわけ走る 人力車 上海に合う 風物として



時計塔 気にして歩む 公園で われも異人か 上海にては
一杯の 紹興酒乾し 上気せり 街に出ずれば マイウエイのうた
長き時間 待ち望みたる 歴史旅 夫の足跡 東の間のぞく
マンションの 洗濯物の はためきは 探せど見えず 街美しき
大声で 会話交わすは 習性か 大陸なれば 拡散ゆえか
どこまでも 芦原のみと 大地上 ビルの林立に 面影はなく (完)

中国ガイド：鄧鉄輝君よりの手紙



泉三郎先生

拝啓 酷暑の候、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

先日の中国・歴史と上海万博の旅で、大変お疲れ様でございました。

旅行中に、歴史などに関する貴重なお話をたくさん聞かせていただき、勉強になるものが多く、小生にとっても一生忘れられない有意義な8日間でした。

その後の6月29日から、正岡子規の妹の孫にあたる正岡明先生が引率した歴史のツアーを受け入れ、大連・旅順と子規ゆかりの金州を4日間案内しました。

金州には「行く春の 酒をたまはる 陣屋かな」という子規の句碑が残っており、みんなが句碑の前で、正岡明先生の説明を聞きながら、子規、妹の律、叔父の加藤拓川などの歴史人物を偲んでいました。このたび先生から著書と米欧回覧ニュースをわざわざ送っていただき、心より感謝しております。

目下の観光シーズンでは仕事に追われてまとまった時間がありませんが、少しずつ時間を作り拝読させていただいております。

『岩倉使節団という冒険』と『堂々たる日本人』を読みながら、岩倉使節団の時代の歴史に引かれて、先生の素晴らしい文章にも魅了され、感服している次第でございます。

先日上海では山田先生と小野先生からも貴重な歴史の本をいただき、今は同時進行で『小村寿太郎とその時代』も読んでおります。日露戦争の歴史背景に関する資料が多く、今後の歴史案内に生かしていきたいと存じます。歴史の真実そのものは一つしかありませんが、見る人、見る角度によって、異なる形に見えてきます。小生の信念は、できるだけいろいろな方面の歴史を勉強し、歴史の真実に限りなく近い歴史の立体像を掴み、それを忠実にお客様に案内して、観光業に従事しながら、日中友好の架け橋となるべく努力したい所存でございます。以上、取り急ぎ御礼まで。

今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

遼寧北方国際旅行社有限公司

〒116001 大連市中山区保定区2号嘉和大厦A座9J

鄧 鉄輝 (とう てつき)

上海での岩倉使節団の足跡を追って

三原 浩

岩倉使節団の一行約 16 名は欧州からの帰途、マルセイユからアヴァ号でスエズ、アデン、スリランカ、香港などに寄港し、1873 年 9 月 2 日朝上海に到着した。久米邦武の「米欧回覧実記」（岩波文庫・第 5 編・第一百巻、以下「実記」と略記する）によると、その夜は「アステルハウス」（p.331）あるいは「アッソル、ハウス」（p.332）に宿したと記されている。このホテルで 2 泊の後、4 日夜ゴールデンエージ号に乗船、5 日朝出港して長崎に向かった。一行は 600 日を超える世界一周見学旅行の最後の 3 日を、上海の見学で過ごしたことになる。この 3 日間の足跡を今回の我々の中国旅行と重ね合わせて辿ってみたい。

9 月 2 日 アスターハウスホテル

「実記」の 9 月 2 日の項（p.332）によると、このホテルは蘇州江という運河の橋のたもと（南岸ではなく北岸のはず）で黄浦江西岸の外国人居留地の近辺にあったらしい。帰国後インターネットで調べてみると、**ASTOR HOUSE HOTEL**（浦江飯店）という三ツ星ホテルがこの条件にぴったりの黄浦路 15 号に現存する事がわかった。このホテルは上海港開港後初めて西洋人が経営するホテルとして、1846 年イギリス人リチャードが外灘で創業、1857 年現在の場所に移転した東アジア最初の西洋式ホテルだという。1910 年、ヴィクトリア朝バロック様式に改装されたので、岩倉使節団が泊まった 1873 年当

時の外観とは変わっているかもしれない。使節団がワシントンで面会したアメリカのグラント大統領も、数年後このホテルに泊まっており、後年にはアインシュタインやチャップリンなど、有名人も泊まっている。どなたか既に調べられたかもしれないが、1873 年 9 月の宿泊客名簿が残っていれば、岩倉や久米の名前が見つかるかもしれない。今回、外灘で 1 時間ほどの自由時間があり、近くの和平飯店でコーヒーでも飲んで休憩しようと、現地ガイドの余さんの案内で行ってみたが、改装工事中で入れなかった。和平飯店からアスターハウスホテルまでは、地図で見ると 500 メートル余りの距離なので、事前準備をしていれば、行って調べる事も出来たのにと後悔している。次回上海訪問の機会があれば、このレトロでクラシックなホテルにぜひ宿泊してみたい。

9 月 3 日 上海老街と豫園

わが平成の中国視察団は、泉理事長以下 14 名で、大連、旅順、瀋陽を回覧ののち、ガイドの鄧さんを含め総勢 15 名で 6 月 21 日空路上海入りした。最初に案内されたのが、**上海老街**と明代に造られた庭園**豫園**であるが、「実記」の 9 月 3 日の項（p.333）には、「雑然として不清潔な商店街」や「城皇廟の庭園」を訪問、民情を視察した記述がある。豫園の名は出てこないが、使節団が視察したのと同じ商店街や庭園を我々も見たとされる。上海の中で 137 年前と比べて最も変化の少ない地域なので、当時の古い建物と共に残っている「浅草的」雰囲気を感じることが出来た。久米にしては珍しく、燕

の巢などをご馳走になったと書いているが、上海料理の味も当時と今と殆ど変わっていないのではなかろうか。

話が前後するが、我々の旅行の前半部分について、**個人的なノスタルジア**になるが、ここで触れておきたい。私は昭和9~10年頃旅順に1年ほど住んでおり、当時の写真を見ると、かすかに記憶がよみがえってくる。母の残した記録から「鎮遠町」の町名が判明したので、出発前から旅行社に依頼しておいた所、鄧さんは、昭和12年版の「旅順市街及戦蹟案内図」のコピーを用意してくれていた。旅順観光の途中、旅順博物館の近くで、今は区画整理で「栄華街」となっているその場所に案内してくれた。ロシア人の建てた当時の家は建て替わっており、街路樹もそれほど大きくなく、75年前を偲ぶよすがはほとんど無かったが、納得することが出来た。

瀋陽(奉天)では、予定の観光コースに追加して、満州事変の発端となった柳条湖事件を記念する「**9.18 事変博物館**」を見学した。その敷地の片隅に風雨にさらされ横たわる日本語の石碑を発見した。碑文から察するに、これは満州建国までに満州で命を落とした日本兵慰霊のため、奉天に建てられた、靖国神社の分社に在ったものらしい。日付の昭和7年3月10日は、かつての陸軍記念日にあたり、私の生年月日でもある。戦後65年の今、このような石碑がこの地に残っているのは驚きであったが、歴史的記念物として保存してあるのか、侵略者に対する見せし

めなのか、あるいは土中に埋めたり破壊したりする費用を惜しんだのか、いずれにせよ私は自分の墓誌が捨てられているのを見たような、複雑な感懐を覚えた。中国にとっても日本にとっても、この昭和6年9月18日に始められた事変、それに続く昭和7年の満州国成立は、その後の苦難の時代の始まりとして、歴史的に記憶されるべきターニング・ポイントであったと言えよう。

9月4日 江南造船場

ここで本題に戻り、「実記」の9月4日の項(p.335)を読むと、使節団一行はこの米欧回覧の最終日に造船所を見学している。久米は「申江ヲ下ル三英里ニテ、造船場ニ至ル」と記しているが、「申江」は「黄浦江」の別名、「下ル」は「上ル」の間違ひと思われ、そこにあつたのは、1865年に中国で初めての造船工場として開設された**江南造船**である。当初は英国人12名の指導でスタートしたが、使節団の訪問した1873年には既に中国人のみで操業し、大砲や小銃も造っていたこと、**翻訳局**があつて、多くの欧米の技術書を漢訳していたこと、**ドックが2基**在ったことなどが記されている。創業から143年後の2008年、江南造船は、長江河口外の長興島に移転し、ドック4基を有する年産450万トンの造船所となった。移転の跡地は上海万博の会場用地(主会場のA~C区とは黄浦江を挟んで北側になるD区とE区の大半)として提供された。日本産業館やその他の企業パビリオンの並ぶD区、E区の中で、最大のものが、かつての江南造船の溶接工場の跡に建てられた中国船

船館パビリオンである。

ウィーン万博と上海万博

岩倉使節団は、米欧回覧の最終コースでオーストリアに二週間余り滞在し、折から開催中のウィーン万博をみっちりで見学、それまでの回覧の総仕上げを行った。わが平成の中国視察団の今回の旅行のハイライトは、6月22日の上海万博見学であった。我々は米欧回覧の会理事の塚本さんのお蔭で、A区の日本館と中国館、C区のドイツ館をVIPルートで効率的に回覧する事が出来た。午前の日本館と午後の中国館の間の自由(昼食)時間に、大森さんと私はB区の太平洋聯合館、C区のマルタ共和国館を回り、EU・ベルギー館の行列に並んだものの遅々として進まず、大森さんは賢明にも入館をあきらめ、ベルギービールだけ飲んで、A区の集合場所へ戻られた。私は時計をにらみながら何とか入館した。1995年までの8年間を過ごしたブラッセルの街並みの写真を見て、懐旧の念に浸る時間もなく、駆け足でゴディヴァの横を通り抜けて、集合場所へと急いだ。しかし、5分遅刻して、皆さんにご迷惑をお掛けした。A区からC区へ2往復したこの日の私の万歩計は、新記録の2万歩を示していた。

翌6月23日は、杭州または蘇州のオプションツアーの予定が組まれ、私は蘇州を選んでしたが、人数が集らず、杭州行きのみ催行された。もともと私は1970年の大阪万博の経験から、一日で見られる内容は極めて限られると思っていたので、これ幸いとこの日は単独行動で再度、

上海万博へ出掛けることにした。もちろん一番のお目当ては、使節団の足跡のある江南造船の跡地に建てられた中国船舶館である。この日は、ゆっくり朝食をすませ、ホテル(国際飯店)で160元(約2,200円)の一日入場券を買い、タクシーでE区に最も近い3号ゲートへ行き、30分余り行列して入場、まず通りがかりの**信息通信館**の行列が短かったので入ってみた。これは**情報通信館**で、「夢」をテーマにして、巨大なスクリーンに未来の生活を映していたが、入り口で携帯端末を渡され、イヤホンを使うと日本語で説明を聞く事が出来た。

中国船舶館



(写真①)

このパビリオンは、江南造船で使っていたクレーンを模して、実物大に再現したものを骨格としている。(写真①) 横から見ると龍の背骨を思わせる鉄骨構造で、龍は中国では特別の意味を持つ動物だが、船の竜骨という関係のほか、造船業が全工業のバックボーンである事を示唆しているという。中国造船業の未来を展望する展示部分は北側約8,000㎡のスペースに4層、23.5mの高さに重層的に作られている。緩やかな斜面を、動く歩道で昇りながら、環境と省エネルギーをキーク

ードとした最先端の大型コンテナ船、LNG タンカー、深海作業船、海上農園、五つ星ホテルクラスの巨大クルーズ船などの模型や説明パネルを見学した。残りの南側約 10,000 m²は吹き抜けの広場で、過去の江南造船ほかで使われていた 1925 年イギリス製 3 本ロールのベンディング・マシン、1930 年日本製の油圧プレス、大きな実物の錨やスクリュウ、マスコットの握る舵などが展示されている。(写真②) 南側の黄浦江に面した景色の良い高さ 10m の 2 階に相当する部分には、セルフサービスのレストランがあり、ここで対岸の日本館や中国館などを眺めながら、おそい昼食とした。



(写真②)

中国船舶館の近くには、「実記」に出て来る江南造船の**翻訳局**が入っていた黄色いレンガの二階建てが唯一残されているようだが、残念ながら見落とした。2003 年発行の米欧回覧の会編、「岩倉使節団の再発見」の 175 ページに、高田誠二先生は「久米が英米科学技術書の漢訳（上海、江南製造局翻訳）をきわめて効果的に活用した」と述べておられるので、久米美術館に数多く保管されている漢訳専門書は、あるいは、1873 年にここで購入されたものかもしれない。

中国の造船業は、量的には既に韓国、日本を抜いて世界一である。**江南長興造船基地**は、2015 年の第 2 期工事終了後には、海岸線 8km におよぶ世界最大の造船基地となる見込みで、航空母艦建造のうわさもある。その頃には質、量ともに世界一の造船国になっているであろう。中国船舶館は、10 月末の万博閉幕後も、恒久的に残し、**江南造船博物館**として利用する計画もあるらしい。

おわりに一地下鉄で

このあと、**3 基のドック跡**の傍を歩き、船で黄浦江を渡り、対岸の A 区で仏教遺跡など 7 つの魅力的な世界遺産を持つ**スリランカ館**を覗いて、万歩計が 13,000 歩を超えた所で 7 号ゲートから万博会場を出た。タクシーが見当たらなかったので地図で調べ、最寄りの地下鉄 7 号線から 2 号線に乗り換え、人民広場のホテルに帰ることにした。パネル式自動販売機で切符を買うのを、身振り手振りでそばにいた高校生に助けてもらい、同じ方向へ行くというので一緒に乗った。かなり混んでいたが、乗るや否や近くの若い男性が、パッと席を立てて譲ってくれた。一人で 2 号線に乗り換えた時も、学生らしい若い子がすぐさま立って代ってくれた。万博帰りのよほど疲れた老人に見えたのか、事実その通りではあったが、日本の地下鉄では殆ど経験したことがないだけに、純粹に嬉しかった。前日、国際的に見て、中国人や日本人のマナーの悪さが話題になっていたのだが、当局の旗振りがあったにせよ、今回の旅行の最終日に、大変気持ちの良い経験をさせてもらった。上海の地下鉄は 1995 年に 1 号線の建設が始ま

ったが、総延長は既に東京を追い越し、2012年には510kmに達し、ニューヨーク、ロンドンを抜いて世界一の長さになるという。

車両も駅も新しく清潔で、冷房も完備、物理的にも快適な乗り心地であった。(2010年7月25日記)

中国東北紀行と上海万博の旅に寄せて

大森 東亜



中国行は今回の2010年6月大連・上海等を含めて4回目。初回は06年2月西安、2回目は06年8月大同・北京、3回目は昨年12月上海・蘇州。西安は古都旧長安、かねてよりの憧れの地、奈良・平城京と京都・平安京の原型とシルクロードの出発点、さらに空海の留学地でもあった。2回目は中国緑化支援のボランティアとして大阪のNPO法人「緑と地球ネットワーク」による黄河高原での植樹活動。大同の農村宅に一宿させてもらい、村の子どもたちと汗を流した。大同の雲崗石窟、北京・万里の長城はおまけであった。昨年の上海行は中国の経済活動の中心である上海の実際に触れたいと思ったほか、万博開催時の上海の混雑を避けるためでもあった。今回の上海行は回覧の会恒例の今年の新年会で会員の塚本氏が日本代表として出向くことになり、会として塚本氏を翼賛奨励するためツアーを計画していること、さらに日程

に大連、旅順、瀋陽が加えられるという、中国東北部には以前から一度訪れたかったので、ツアー参加の動機付けがいつそう加速され今回のツアー参加となった。

今から110余年前、1894年(明治27)に日清戦争、続いて1904年(明治37)に日露戦争と、日本はユーラシア大陸の国々と朝鮮半島と中国東北部(旧満州および遼東半島)の支配権を求め戦火を交え、多大の犠牲者を出してその権益と領土を拡大した。日清戦の戦病死者は日本約2万人(うち台湾戦1万、軍夫7千)、清国推定3万人(うち台湾1万4千)、日露戦の戦病死者は日本8万4千人、露国5万人に及んだ。その戦跡についていまひとつ具体的イメージに欠けるところがあった。しかし今回の旅で中国東北部を含めた大陸のほんの一部にふれただけであるが、大連・旅順・瀋陽(旧奉天)を訪れ多少とも知ることができた。瀋陽では現代中国と直結する日中戦争の前哨、1931年(昭和6)満州事変発端の柳条湖事件、さらに1929年張作霖列車事故死現場を通して近代から現代に至る歴史的事件に思いを馳せる時を与えられたほか、張作霖・張学良邸の見学により張学良による蒋介石軟禁、いわゆる西安事件について理解できた。とりわけ旅順郊外の日露戦での二〇三高地は綺麗に公園化されていたが、この地において日本軍攻撃参加人員約13万人(戦死1万5千余人、戦傷約4万4千人)、防御する露軍4万

7千人（戦死8千人、戦傷約2万人）により草木を焼き尽くした禿山となる激戦が行われ、言語に絶する犠牲を払って日本軍が攻略した。さらに占拠したこの地から旅順港（あいにく霞に隠され港は目撃できなかったが、遥かに眺望）を砲撃し露海軍に甚大な打撃を与えたことを思い感慨深いものがあった。また奉天会戦があった瀋陽では日本軍約25万人（死傷者7万人）、露軍約32万人（死傷者6万人、行方不明2万9千人）が激突し、その中心地東鶏冠山は露軍の堅固な要塞がつくられ、擁壁には無数の弾痕の跡が残され、現在は緑蔭に覆われた防壁前には死傷者が累々としていたという説明を聞き足の竦む思いがした。二〇三高地とともにこの東鶏冠山にお線香を持参のうえ弔意を表すべきであったという思いに駆られた。東鶏冠山堡壘（露軍要塞）を中国政府は戦争遺跡・博物館として整備し、歴史教育に提供しだしたのはついここ数年前からのことであるという。自国の国土を外国軍によって荒らされた戦跡地を残すことに中国人には複雑な思いがあるのではないかと推察した。

思えば、高校時代の教師からわれわれの親族たち、祖父母、父母、われわれの三代にわたってアジアの地にどのような足跡を残してきたか地図上に追ってみてはどうかとの話があった。私の場合、母方の甥が小学校卒業間もなく満州開拓団に志願、幸か不幸か病気のため日米戦前に帰国したこと、父方の叔父（四男）が徴兵で満州に送られ、沖縄に配転後、戦死、叔父（五男）は沖縄で戦病死している。大学のゼミとクラスの友人がそれぞれ瀋陽、大連生まれ、一人の父はシベリヤに抑留され、死亡しており満

州は身近く感じていた。

ところで瀋陽行を通して清国の成立を改めて知ることができた。東洋史の勉強不足のため従来、清朝について旧弊な異民族により中国は不幸を蒙ったとのイメージが強かったが、清朝が武力による大陸制覇をしたのが1644年、清朝として中国支配が初まったのが徳川による江戸幕府開設の1603年に遅れること約40年、意外と武断政治による統治が日本と中国とで同じように行われ、時代と政治の性格に意外と差がないことを知らされた。清朝が武力支配とともに周到な統治政策、すなわち八旗制と五族融和（満、漢、モンゴル、チベット、ウイグル族）策、母語である満州語から漢語への言語転換策に象徴される文化政策を瀋陽故宮「崇政殿」の掲額文字によって教えられる。清朝の文化政策について、満州語から漢語重視の言語併用政策は、日本が朝鮮半島と遼東半島を含む満州支配を行ったとき、日本語と神社信仰など日本文化をその支配地に押し付けたやり方を省みると、戦前の朝鮮総督府、関東軍と満州政策を立案統御した日本の政治指導者たちは漢詩と儒教教育を受けながら清朝を含む中国と中国の歴史について何を学んでいたのかと考えさせられた。満州・中国東北部の現在の経済発展には満鉄のインフラなどが寄与していることは間違いないが、日本が中国東北部・満州に寄与したプラス部分より満州と日本の一般の人々が蒙った甚大な災禍、マイナスを思うとき、日本の統治者たちがやってきた歴史的営為には呆然たる思いにさせられる。

日本の近代が「坂の上」を迎えた日露戦争後、時代に起伏はあるものの日本は日出

る国から日没する国へと転落に向かう。1937年（昭和12）、盧溝橋事件を契機に日中戦争、1941年の日米戦争、さらにソ連の日ソ中立条約破棄により、1945年、日ソ戦争に突入する。日清戦、日露戦に勝利して約40～50年、日本は台湾、朝鮮半島および満州を支配地とし殖民政策を実施してきた。満州では傀儡国家「満州国」を建国し、関東軍の支配下、実権は日本人が握る行政体制がとられる。満州国面積は130万km²（日本本土38万km²の約3.5倍）、人口は1942年に44,242（千人）、うち日本人は1,075（千人）であったのが敗戦時に日本人は約155万人に及ぶ一方、日ソ開戦時、軍人・軍属は約50万人に達していた。終戦時の死者が、一般人17万9千人、軍人・軍属6万6千人、合わせて24万5千人と推計されている。これに対し引揚者132万6千人、残留者5万6千人、ソ連抑留者53万人に及んだとされ、大連港を中心に引き揚げに伴う悲喜劇が繰り広げられた。大連は現在、中国第三の港湾都市として中国東北部の経済拠点として活況を呈し、新たな港湾基地を建設中であった。ジェトロの支店や日本経済新聞社支局が開設されるなど日本との経済交流が活発なことも伺えた。

上海行では、まず万博について感想を若干記させてもらおうと、中国が万博を開催すること自体に私は意義を認めたい。TVやインターネット等のマスコミを通して中国の人々が外国の新しい事物に触れる機会は文化革命時代と比較した場合、格段の差があることは誰も認めるどころと思われる。しかし、中国に政治的社会的に言論の自由がなく、様々な面で日本とは違った意

味での社会的制約があることは間違いない。そうした社会的環境の中で万博という額縁を通してであれ、世界各国の文化に触れる機会をえたことを歓迎したい。中国館では映像により中国の人々の生活の歴史をスペクタクル化して見せてくれたこと、子どもたちの近未来予測を絵に描かせ多数展示されていたこと、エスカレーター設置

出口部に大規模な水槽、大池をつくりたつぷりと緑の葉を茂らせハスの大輪を咲かせるとともに、ガラスの内壁に流水により水文字を描出させていたこと、中国の人々の水と環境への憧れを強く感じさせられた。日本館については、トキと人々の交流を通して環境の問題を考えさせられ感動を覚えたが、そのほかの市民生活とロボットとの関係は私には生活感との隔たりを覚え、違和感があった。中国の人々にどのように受け取られたか、中国の人々の生活向上とをもって実質的に貢献できる環境アイデアを提供できなかったのかと思う。国としてのプロジェクトでなく、企業ベースの発想の狭隘さを感じさせられた。なお個人的には遣唐使船の実物モデルを期待していたのに見れず残念であった。ドイツ館は展示に経費はかけられていないようであったが、ドイツの市民生活と文化を伝える意味では日本の企業文化感覚に比較してドイツの都市文化のメッセージを伝えていたように思えた。その他の国ではマルタが小国ながら巨石文化の7千年の歴史を有する国であること、デンマーク館の屋上がダイナミックなウエーブをつけた走行路がつくられ、自転車数十台乗り回されている建物デザイン、スペイン館の椰子の葉で覆った建物が印象的であった。なお、帰国後、NHK深夜便で

の谷村新司の話によると、万博の開会式では谷村新司により「昴」が唄われた歌唱中、中国全土からインターネットによるアクセスが200万寄せられたという。「昴」を通して中国の人々の思いを感じさせられた。

上海での自由行動日に地下鉄8号線で「人民広場」から4駅目「虹口足球场」で下車し、魯迅の旧居を見学した。魯迅は1881年(明治14)浙江省紹興に生まれ、1936年(昭和11)上海で没した。最晩年を過ごした旧居は、虹口区山陰路に所在する大陸新村9号の集合住宅である。旧居の近くに魯迅公園があり、公園の中に魯迅の墓と魯迅記念館がある。旧居は車の行き交う大通りに面した奥まった路地の中にあり、路地の入口には門扉があり住人は鍵で出入りしていた。入口には上海市指定「優秀歴史建築」(HERITAGE ARCHITECTURE)の掲示がある。魯迅は若き21歳のとき、1902年、官費留学生として来日し、東京弘文学院で学び、1904年(明治37)仙台医学専門学校に入学し、1906年同校を退学し、文学に転進する。後年、有名な「藤野先生」を著し、先生の人間性に思いを寄せる。藤野先生から添削を受けた勉学中のノートは現在、仙台の東北大学史料館と上海魯迅記念館の両館に展示され、東北大学には魯迅が学んだ古い教室が残される一方、魯迅記念館には魯迅の友人である日本人内山完造の胸像と内山書店の店構えが復元されている。魯迅が晩年、日中戦争の急迫に伴い、日本官憲から迫害を受けたとき、年来の友人であった内山が陰に陽に魯迅をかばい助けたこと、内山の家を魯迅の旧居に提供までした

関係を称揚してのものである。魯迅の小説は私には面白いとは思えないが、中国では中国人の民族魂を鼓舞した国民文学の父として国家的に評価されている。そのことは魯迅の墓と魯迅記念館に見事に象徴されていた。こうした魯迅は近代から現代にいたる中国と日本との関係において因縁浅からぬ人物であることを知らされるとともに、日本で魯迅のように国民文学の父として位置づけられる文学者は誰になるのかと考えさせられた。魯迅公園は人々の憩いの場となっており、平日の午前中から社交ダンスや中国将棋、トランプに興じる人々で賑わっていた。

自由行動日の午後は、黄浦江の外灘から遊覧船で長江河口との合流点を目指す。片道1時間半、往復3時間、料金は150元。70~80人乗の遊覧船にお客はアメリカ人6人、中国人2人、私の計9人でのゆったりした遊覧。左岸に1880年代の古い港湾施設が点在する一方、兩岸で大型船舶の造船と修理が活発かつ盛んに行われているのには上海の工業力を感じさせられた。中国海軍の駆逐艦も多数停泊し、中には洗濯干しをしているものもある。ひたすら走りぬいて長江河口と思われたところに出たが、長江の中島が遥か遠く見え、長江は海も同様であった。長江との合流点に達した後、遊覧船は黄浦江河口の外には余り出ないうちに復路に着いたため、長江と黄浦江の色の変わり目にはお目にかかれなかったのは残念であった。長江にかかる大橋も遥かに遠方おぼろげに霞み、長江はただただ広漠とした海を見ているようであったが、私としてはともかく長江を目の当たりにして今回の中国・上海行が満足した旅となっ

た。

『米欧回覧実記』第一百卷において久米邦武は、香港及ヒ上海ノ記 1873年(明治6)九月五日 次のように記し、中国上海を後にして帰国の途についた。

「十時ヨリ、黄浦江ヲ下リ、十一時ニ揚子江口ニ至ル、揚子江ハ、支那第一ノ大河ニテ、世界第二ノ大河ナリ、此水ハ蜀ノ岷山ヨリ濫觴スルト言伝ヘタレトモ、実ハ西域葱嶺ヨリ来ル、源流甚タ遠シ、其江漢ヲ合セテ、海ニ朝宗スルニ当リテ、河勢ノ浩汗ナル、大湖ノ如シ、淼トシテ天ヲ浸シ、崇明ノ島ハ浮ムカ如ク、新典沙ハ殆ト沈マントスルカ如シ、曾テ荷蘭陀ニテ「スケルト」及ヒ「メイセ」ノ河口ヲスキタルモ、此ニ比スレハ猶数等ノ下ニアリ、凡支那ノ

海浜ハ、黄河、揚子江等黄水ヲ注ギ、潮色到ル処ミナ黄ナリ、黄海ノ称モ誣ヒサルヲ知ル、此日ハ、終日黄色ノ海ヲ航走シ、昏ニ際シ始メテ青色ノ海トナリヌ、」

<参考資料>

- 1 原田敬一『日清戦争』(戦争の日本史19) 吉川弘文館、2008年
- 2 山田 朗『世界史の中の日露戦争』(戦争の日本史20) 吉川弘文館、2009年
- 3 山本有造『「満州国」経済史研究』名古屋大学出版会、2003年
- 4 山本有造『「満州」記憶と歴史』京都大学学術出版会、2007年

旅順博物館蔵宝物購入顛末報告書

梶 春治

今回の旅行中、相部屋で7日間を過ごした小野さんから、旅行記には必ず“旅順博物館で購入した収蔵品の顛末”を書くようにとの天の声ならざる、天命に基づき、筆をとっております。

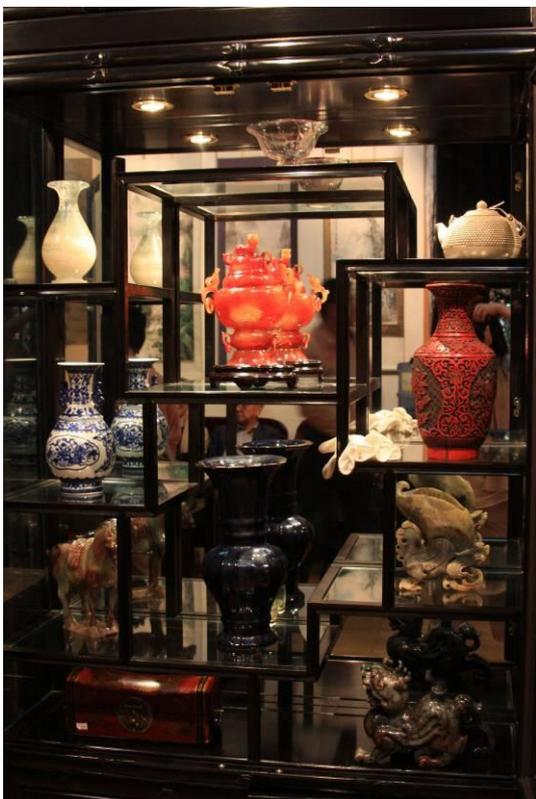
さて、空路、霧の大連へ安着し、大連市内に向かう途次の、整然としてきれいな大連の町並みは、私の知っている中国とは思えない街でした。

翌18日、旅順港、爾靈山、水師營、203高地を見物して、旅順博物館へ入るまでは、ここで人生にこんなサプライズがあるとは、予想もしておりませんでした。

展示品をひとつとおり見て廻り、中国の古

い歴史ある数々の美術品の展示品に感動して、最後に別室の見物かと思いきや、それまで日本語で説明してくれていた博物館学芸員の張恒信さんが、おもむろに白い手袋をはめて、玉物の説明を丁寧始めるので、いぶかっていると、唐突に、この部屋の御物は売却することになっているという。既に、一部は北京からの客に売却済みとかで、このチャンスを逃すと明日にも売り切れそうな気配を見せつつ、日本文の契約書をチラつかせる。豪華な飾り棚ごと、日本への宅配料、税込み140万円で、品質から配達まで博物館の保証つきという触れ込みである。泉さんも買いたいほどのよい物だといわれるし、まわりの仲間もそれぞれに、安い買い物ではないかなどと嘯し立てるの

で、最初は、全く買うつもりのない私も、躊躇しながらも、次第にその気になり、最後には、近くにあった、気に入っていた一品を加えて、180万円での契約書に署名してしまった。博物館の売却なので、一応は信用していたが、後になって少し心配になってきた。実は、急かされていたこともあり、飾り棚の中の品物全体も、追加した品物も写真を撮ることを全く失念していたことに後で気付いたのである。(注：下の写真は、古股さんの撮られたものを編集部で添えたもの)



品物がすり替えられていても証明のしようがないのだ。後の祭りである。ガイドの鄧小平の孫こと、テッチャンには、その点を確認の電話をしてもらったところ、信用してよいとのことであった。テッチャンを信じるしかない。

旅は、そのあと瀋陽、上海と続けて、ホテルにも食事にもすべてに大満足して、6月24日には日本に帰国した。旅順では、頭金5万円を支払い、帰国後、直ちに残金を払い込んで、固唾を吞んで、品物の到着を待つ日々となった。だが、中々来ない。

ガイドの鄧鉄輝君に送金したことを連絡すると、折り返し7月上旬には届くだろうとのことだったが、待てど暮らせど、一向に配達されてこない。心配になって再度、電話で問合せしたところ、大連の税関でまだ留められており、年代ものが混じっているので、輸出許可までにも少し、時間を要するとの返事を得て、騙されたのかななどの思いがよぎる。

再び電話してみると、通関の解決には、税関に賄賂が必要になるが、それは送り主の方で処理するので、心配せず信用して待つて欲しいとの返事であった。

その間に、米欧回覧の会の7月例会があり出席し、皆さんから宝物は着いたかとの質問を何人からも戴き、正直に現状を説明した。一方、不安は募るばかりだ。

待つほどに、やがて税関でトラブルになっていた品物が、まず先に着いた。肝心の後のものはどうなっているかと、今度はそちらが心配になる。そこへ、先方より今回のトラブルのお詫びに何かサービスしたいので、希望のものはないかというので、旅順での契約直前に、一旦、入れ替えて、除外したほうの仏像を指定すると、上司と相談のしたあとで、応諾の返事が来る。

そこまでは何とかよかったが、御物のうちで、銀器と信じ切っていた2点の急須に緑青がふいているではないか。これは一体何物だとの疑念が走る。早速、知り合いの

宝石屋に見せてみると、銀は黒く錆びるので、銀メッキした銅ではないかという。

追って、博物館から契約全体の写真入説明書の綴りが届く。一見する限りでは、写真と現物は一応すべて同じものであった。しかし、契約の間際に、泉さんの提案で、隣の棚の中にあった馬の石像に変えたが、どうも記憶の中の馬と違う馬になっているようにも思える。一度、泉さんにも第三者の目で現物鑑定をお願いしようかとも思っている。

7月29日になって、やっと残りの品もすべて届いた。一応は、契約は無事履行されたのである。だが、中国の梱包技術は拙

劣である。棚のガラス2枚と、メノウの飾り物一部が破損していた。その代替に、新しく、少し大きめの同じものを後で送ってくれるという。更に、もう一点、何かサービスで付けると言ってきている。

そういう面での対応は悪くないのだが、暗い博物館の証明の中で感激して見た御物も、白日の下で改めて眺めると、何か白々したものを感じないわけでもない。

海外での買い物は、充分気をつけないといけないといういつもの反省をあらたにした次第である。以上、天命の顛末報告まで。

しかし、これらすべてを含めて、楽しい実のある思い出多き旅でした。謝謝！再見。

中国の歴史に触れて



古俣美樹

この度参加させていただきました米欧亜回覧の会主催の中国旅行は、数多くのことを学ぶことができました。中学・高校時代の教科書には日清・日露戦争や満州事変に関する記述がほんの数行しかなく、何が起きたのか良く分からないまま育ち、そして戦争のむごさに目を向けるのが怖く、自ら進んで詳しく知ろうともせず今に至っているため、背景知識がゼロに近い状態でした。

自らを歴史・兵器オタクと呼んでいらっしやったガイドの鄧鉄輝さんが中立の立場で詳しい説明をしてくださったので、各史跡にまつわる悲しい歴史を先入観なく吸収することができました。

その中でも私にとって最も衝撃的で頭から離れない記憶となったのが、旅順は東鶏冠山の展示館で見た1枚の写真でした。日本軍の兵士が旅順の平民の首を切らんとす

る処刑の瞬間。取り囲んで見ている兵士達が一様に口元に笑みを浮かべているその表情に戦慄を感じたのです。戦時下では敵国民に容赦などかけていられないのは当然のことでしょう。殺戮が繰り返される異常な世界で精神崩壊せず生きていくため、自己防衛本能が働き、笑い事にすり替えられてしまったのでしょうか。集団心理も作用していたのでしょうか。しかし、人間の本質の醜さを見せ付けられた思いでした。この世で数多起きている戦争は、さまざまな理由がその発端となっていると思いますが、相手も同じ人間として尊い命を持つ存在であると認めることさえできれば、対話を通じて共存の道を模索できるのではないかと思えてなりません。プライドや傲慢、偏見、強欲、独占欲——人の心の中に潜む“弱さ”は“悪”という形で表出します。本当の敵は相手ではなく、自分の中にいるのだと気

づけたら。

もうひとつ印象に残ったのが各地の博物館で目にした中国の伝統文化の数々です。その長い歴史の中で培われた美や叡智の証には、本当に感嘆させられました。艶やかな色彩の民族衣装は今の時代にも通用するものばかり。南米や東欧で見かける民族衣装と共通する点も多くありました。やはり同じ人間。美しいと感じる心は、いつの世も世界共通。人間の根底に流れるこうしたつながりが、敵対心や搾取関係を解消するようになる日が来ることを願ってやみません。

最後になりましたが、会員である母のお供として同行させていただきました私にも細やかな心配りをしてくださりました皆様にお礼申し上げます。お陰様で膨大な枚数の写真と共に、本当に楽しい思い出を沢山持ち帰ることができました。謝謝！



中国への旅

永島脩一郎



今回の中国への旅は、私にとっては三回目である。

第一回は、同期生達との長江三峡下りで、この時は、北京、万里の長城、西安等を経て重慶で船に乗り込み、船中二泊、長江を下り丁度長江のダムが完成した時で、やがてダム湖に沈む部分を含め三国志の世界を垣間見ることが出来た。

第二回は、会員でもあった妻の看病のため二十日間ほど北京に滞在した。妻は誠に残念なことにこの地で客死した。このため、今回の旅が中国である為、当初、参加は、聊か、躊躇するところがあった。ただ、今回は北京には行かないということが判明し

たことと、特に日露戦争の古戦場を訪れる機会であることが、第三回目の中国行の決心を促した。

亡き妻の母方の祖母は、海軍軍人夫人で、鎮海や旅順で生活したこともあったと聞いていた。旅順の英語名がポート・アーサーであると教えてくれたのも彼女であった。彼女の蔵書の中に伊藤正徳の「大海軍を想う」と司馬遼太郎の「坂の上の雲」があり、若い頃これを借りて読んだ。その後島田謹二の「ロシアにおける広瀬武雄」「アメリカにおける秋山真之」などを読む機会があった。

終戦時、国民学校、即ち小学校の3年生であった私の耳に、今も鮮明に残っている、そして口ずさむことの出来る「文部省唱歌」がある。「広瀬中佐」である。

とどろく砲音（つつおと）飛び来る弾丸
荒波洗（ある）うデッキの上に
闇をつらぬく中佐の叫び
「杉野はいずこ 杉野はいずや」

船内くまなく尋ぬる三度（みたび）
呼べど答へず探せど見えず
船は次第に波間に沈み
敵弾いよいよあたりに繁（しげ）し

今はとボートに移れる中佐
飛び来る弾丸（たま）に忽ち失せて
旅順港外怨みぞ深し
軍神広瀬とその名残れど

この唱歌は、周知のとおり第2次旅順港口閉塞戦時の状況が背景になっているもので第4学年用となっているが、何故か「福井丸」の絵とともに私の脳裏に焼きついてい

る。

広瀬中佐は、子供の私にとって正にヒーローであった。

日露戦争は、明治37年で、岩倉使節団が上海を訪れたのは同6年なので約30年後の戦である。今回の旅でこの戦いの激戦地である203高地、旅順港、水師営などを訪問することが出来、大満足であった。また、終始ガイドを務めてくれた「鉄ちゃん」こと、鄧さんは、自らを「歴史おたく、軍事おたく」と称していたが、その深い研究、勉強の程が窺がい知れる博学振りには感服した。

また、張作霖父子関連の遺跡や柳条湖（溝）付近所在の博物館を訪れることができたのは、望外の喜びであった。博物館と

いえば、遼寧省博物館、旅順博物館及び上海博物館を訪れたが、短時間ではあったが、いずれもが中国の歴史・文明の長さ、深さを再確認させてくれるものであった。

上海は、2回目であったが前回、時間的に観光は出来なかったが、今回は昼夜に亘る「バンド」散策も楽しみ、万博については、我らのお仲間、塚本日本政府代表のお陰で誠に効率良く見学できた。ご多忙の同氏のご尽力に衷心より感謝申し上げたい。総じて私にとっての第3回目の中国行は実り多い有意義なものであった。(完)

中国旅行断想

小野博正



中国の近代の歴史をめぐる旅

今回の中国旅行は大連、旅順、瀋陽（奉天）、上海を経巡ることによって、はからずも、中国と日本が経験した近代の歴史を考える旅でもあった。わたしの世代も含め、戦後の日本の歴史教育は、どちらかといえば、近現代史を教えることをおろそかにしてきた。いやむしろ、避けてきたというべきだろうか。近現代史は、自ら学ぶしかなかった。それはまた、歴史学者の見方によって、大きく論調が左右に振幅する、不幸な歴史でもあった。

この旅行では、大連から上海まで、一人の若いスルーガイドが付いた。鄧鉄輝君である。彼は、中国旅行社の副総経理、すなわち、副社長であるが、我々が、歴史に興味を持つ一行だと知って、普段は、ガイドに付かないのに、敢えて自らガイドをかってでてくれた歴史通であった。鄧君は言う。

「歴史は語る人、見る人によって、様々に語りえます。それが歴史です。私は、中国、ロシア、日本の歴史書に当たって、できるだけ真実に近い歴史観でお話しするつもりですが、それでも中国の立場に立つ場合があるかもしれませんが、それは許してください。」だが、彼の説明する歴史観は、私の知る限りでは、中立性の高いものだった。

政府の歴史教育に左右されない、こういう中国の若者が育っていることに注目したい。

中国の近現代史は、旅順と大連の辿った歴史に、見事に集約されている。

中国の近代は、アヘン戦争に象徴される。イギリスの仕掛けてきたアヘン戦争で、弱体化した清朝は、1860年には、清朝の北洋艦隊の軍港であった旅順の、英仏連合軍の占領を許す。その後、日清戦争で日本が旅順を占領し、三国干渉の末に、日本に変わって帝政ロシアが租借したが、日露戦争に勝った日本が、再び租借して、海軍と陸軍の司令部を旅順に置き、東北三省の満州を支配の基盤として機能し、1945年の終戦を迎える。

終戦間際に参戦したソ連が戦後に再び旅順を占領管理して、その後10年間ソ連の管理下にあり、中国の軍港に戻ったのは1955年であった。近代のほぼ100年間を外国の支配下に置かれたのが旅順の近代であった。それは、香港の100年の租借にも比せられる長期間の屈辱であった。

同様に、大連も、1898年に、不凍港を求めて、南下してきた帝政ロシアが租借して、港湾都市ダルニーを建設する。東洋のパリを目指した都市計画を進めたところで、日露戦争となり、それに勝った日本が

関東州の門戸として、大連と名づけて、日本の近代化のモデル国家としての満州経営の基地となった。半官半民の南満州鉄道(満鉄)の本社が置かれ、初代総裁 後藤新平が撫順炭鉱、鞍山製銅所を中心に交通、鉱工業、商業、拓殖など多角経営に乗り出して、特に満州事変以降は、大コンツェルンを形成した。

後に、国鉄総裁になり、新幹線の生みの親になった十河信二が、1934年に日本に先駆けて、夢の特急“あじあ”号を走らせた。大連／新京間701キロを8時間半で走り、最大時速120キロであった。大連、奉天、長春、ハルピンに西洋風の建物が、日本人の建築家の手で、次々と先駆的なデザインで建てられ、甘粕正彦率いる、国策映画会社の満州映画協会(満映)は、マキノ光雄が李香蘭をスカウトして、日本映画の全盛期の端緒を開いた。日本の近代的報道写真は、満州写真作家協会によって確立された。ハルピン交響楽団では、朝比奈隆や服部良一が定期演奏会を開いて、満州巡演も行われた。

まさに、満州は日本近代化の先駆的実験場となって、日本内地の近代化に貢献してきたのである。

瀋陽は清朝の発祥の地である。奉天(瀋陽)にある瀋陽故宮が始祖・愛新覚羅(アイシンギョロ)ヌルハチと二代目ホンタイジの皇居であった。瀋陽の東陵(福陵)はヌルハチの、北陵(昭陵)はホンタイジとその妻の墓である。3代から清朝は関内、すなわち長城の内にある北京に王宮を構える。1616年大金を建国、民族名を女真から、満珠(マンジュ)に変えた。満洲の名の起りである。

この清朝は、明を倒して中央に進出し、河南を平定し、台湾を合併し、間接統治でチベット、ウイグル、シンキョウへ版図を拡大して、盛世の時代と呼ばれる270年の大繁栄の時代を築いた。商人を優遇し、海上封鎖したが、自給自足の江戸に似た経済を確立、18世紀には、ヨーロッパの3倍の世界一のGDPを記録している。

今回、瀋陽では張作霖・張学良親子の私邸・官邸であった張氏師府も訪れたが、日本が満州に進出した頃に、東北の地、満州を支配していたのは張氏の軍閥であった。日本は、最初、張作霖とは協調していたが、北京まで手を伸ばし、北伐軍に追われる立場になった張作霖を見限り、1928年に北京から奉天に向かう列車を爆破して殺した。首謀者は参謀の河本大作大佐だった。河本は、満州を、本気で王道楽土、五族協和で各民族の協調融和の国にしようとした理想主義者であった。これが満州某重大事件として秘匿され、彼が処罰されなかったことが、後に関東軍や陸軍の暴発を招く先例になったとされている。河本は戦後も中国にあって、日本軍や民間人の最後の一人まで日本に送還するまでは、中国を離れないと奔走し、昭和24年に中共軍に捕らえられたが、28年に獄中で客死した。

張作霖爆殺のあと関東軍高級参謀は河本から板垣征四郎に代わった。その板垣と河本の部下で、関東軍主任作戦参謀であった石原莞爾は、1931年9月18日に柳条湖にて満鉄の爆破を演出して、満州事変を起し、一万の兵で、張学良率いる20万余の兵を制圧して、満州を6ヶ月で占拠してしまう。蒋介石の国民党と組んでいた張氏

の兵は、蒋介石の無抵抗主義を実践したために、戦わずして敗れたと言われる。

板垣征四郎と石原莞爾は、このあと満蒙の領有は、内地の内閣・司令部が認めないので諦めて、満州国の独立に向けて驀進する。1932年建国、清朝ラスト・エンペラーの愛新覚羅溥儀を執政とした。熱心な日蓮主義者の石原は“最終戦争論”を唱え、人類3千年は戦争の歴史であったが、日米の最終戦争でもって終わり、その後には、恒久的世界平和が訪れ、その戦争に勝ち残るのは日本だとした。しかし、石原は、東條との確執もあったのが幸いしたのか、極東国際軍事裁判をも生き延び、1949年に60歳で病死した。

松本健一氏によると、明治維新と日露戦争までは薩長閥であったのに反して、戊辰戦争後は軍人になるしかなかった東北人が、昭和の戦争の主役だったという。東条英機と米内光政は南部盛岡藩、山本五十六は長岡藩、石原莞爾は庄内藩、井上成美は仙台藩、及川古志郎の南部藩などである。だが、王道楽土を狙った満州国建国もその運営は、やがて「ニキミスケ」と呼ばれる軍人官僚に牛耳られていく。東條英樹、星野直樹、岸信介、鮎川義介、松岡洋右らである。

話は、上海に飛ぶ。岩倉使節団が欧州回覧のあと、最後に訪れた上海は、長江河口南岸の支流の黄浦江沿岸に、アヘン戦争終結の1842年南京条約で、条約港として開港した。そこにイギリス、フランスの租界が開かれ、日米が後に続いた。その公園に、「犬と中国人は入るべからず」の立て札があった時代である。そこを旧市街として、いま万博の開かれている浦東地区は、NYの摩天楼さながらに高層ビルが林立し、

躍進する中国の象徴として、繁栄を極めて
いる。この浦東地区は、1992年までは、
一面の野菜畑で、20年足らずの間の大変
化である。今や市人口は1000万人、周
辺を含めると1700万人とも言われる。

その経済規模を輸出入コンテナ本数で比
較すると、2008年の数字で、世界二位
の年間2798万個、因みに日本の最大コ
ンテナ取り扱い港は、東京で24位の42
9万個、東京、横浜、名古屋、神戸の日本
四大港全てを併せても、上海の半分にも満
たない。その繁栄振りは以って知るべしで
ある。

西湖と蘇東波

芭蕉は「奥の細道」を辿り、東北の象潟に
来たとき、“象潟や雨に西施が合歡の花”と
詠っている。この西施とは、楊貴妃と並ぶ、
中国は春秋時代の傾国の美女・西施のこ
とで、芭蕉のこの句は、蘇東波が、中国杭州
にある西湖で、吟じた「飲湖上初晴後雨」
と題した詩を踏まえている。

水光激灑として晴れてまさに好く
山色空濛として雨もまた奇なり
西湖を把って西子（施）に比せんと欲
すれば

淡粧 濃抹 全て相宜し

蘇東波は蘇軾ともいい、かの有名な詩の「春
夜」で “春宵一刻直千金 花有清香月有
陰 歌管樓台声細細 鞦韆院落夜沈沈 “が
人口に膾炙している詩聖である。

この蘇軾は1089年に、役人として杭
州に赴任した時に、西湖の改修を手掛けて
いる。同じ詩人の白樂天（白居易）も82
2年に、やはり役人として杭州に赴任する
と、同様に西湖の改修を行っている。その

杭州は、マルコポーロが世界で一番美しい
街と記録に残している。“天に天堂あり、地
に蘇杭あり”と蘇州と共にその美しさが讃
えられ、5代十国時代の呉越の都で、南宋
の首都であった。今も、森と湖の都として、
素晴らし環境を保持している。1万年前の
潟を、湖にしたようで、その美しさは、西
湖十景の言葉に表現されている。曰く、

『断橋残雪、平湖秋月（白堤）、曲院風荷（庭
園の風と蓮）、蘇堤春曉、三潭印月（中之島
の三石塔と月）、花港観魚（牡丹園の赤い鯉
の池）、南屏晚鐘（雷峰塔の向かいの淨慈禪
寺の鐘と夕日）、雷峰夕照、柳浪聞鶯、双峰
挿雲（南高峰256mと北高峰355mの
雲）』西湖そのものが、詩的なのである。蘇
軾は、「放生の魚鼈人を遂うて来り、無主の
荷花到る処に開く」（舟遊びの舟を追って魚
や亀が寄ってきて、蓮の花が咲き乱れてい
る）と詠っている。

我が平成の岩倉使節団も、この毛沢東も
林彪も別荘をもったという風光明媚の湖に
船を浮かべ、岸の柳をくぐって舟に乗り、
そよ風を頬に受けながら、白堤の先に蓮池
を望み、南北の高峰と、雷峰塔をはるか遠
くに眺めながら、往古の絶世の美女西施に
思いを馳せた西湖での優雅な一日であった。

躍進する中国をみる

20世紀に世界経済をリードしてきた欧
米と日本の経済に行き詰まり感が出てきた
今世紀の世界を引っ張っているのは、BR
ICSであると言われている。中でも、中
国は今のところ突出した高度成長を続けて
いる。今回の中国旅行で、躍進する中国の
実態は、至るところで実感できた。それは、
羨ましいほどの活況が自信に裏打ちされて

いた。

中国の経済や社会の実態については、専門家でも、まさに百家争鳴である。

曰く、共産党の一党独裁は、崩壊寸前である。さほど遠くない将来に中国は分裂する。

曰く、いまや、中国経済が世界経済を引っ張って、いずれGDP世界一になる日も遠くない。中国は世界経済再生の救世主になる。

曰く、中国は、沿岸部と内陸部の格差が大きく、人権問題を内在する社会である。その上に、資源確保を狙って、世界中に資源外交を展開し、航空母艦・戦艦を増強して、世界制覇を狙っている。ゆめゆめ油断は禁物である。

恐らく、どれもがある意味で正しく、どれもが間違っているのかもしれない。13億とも14億ともいわれる巨大人口を抱えた中国は、見る人により、様々な見方を提供する材料が豊富で、いかなる見方も出来そうである。一方で、“群盲象を撫でる”の類で、巨象の一部を管見しているに過ぎないかもしれない。

私も、その群盲のひとりとなって、私の中国をデッサンしてみよう。

まず、共産党一党独裁である。民主主義を標榜する先進国から見ると、勿論、共産党は人権問題も多発し、社会主義独特の不正・腐敗も内在して好ましくない。しかし、鄧小平以降の中国は、共産党の看板は下ろさないまでも、実質は、まだ国家統制色は残るものの、既に資本主義の道を驀進している。見方によれば、欧米以上に現実的な

資本主義を実践しているとも思える。考えてみると、中国は、古来一度も、民主主義を経験していない。国民は、独裁的な王権の一方的支配に馴染んでいる。それは善悪の問題以前の国民の血肉の体質となっている。中国の、現在成功している資本家たちは、共産党が倒れて、混迷した社会が将来に現出することを思えば、今の政権ができるだけ長く続くことを願っているのではないか。独裁体制も、使いようによっては、毒にも薬にもなる。中国共産党自体も、そのところを十分に承知しながら、共産党の悪い部分を矯め、長い時間をかけて、俗に民主主義的といわれる政体への移行を志向しているのではないかと思われる節もある。

仲津真治氏の話では、天安門事件の時に総書記であった趙紫陽の『極秘回想録』によれば、「民主主義と議会制に優る政治体制はない」「三権分立に徐々に移行することが必要だ」「権錢交易（共産党員によるワイロの横行）の是正」が述べられているという。

次に、中国経済が巨大化して、世界を支配するのではないかと心配があるという。だが、欧米が世界の経済を支配したのは、たかだか19世紀以降で、18世紀までの中国経済はヨーロッパ全体の3倍のGDPがあったと服部英二氏は著作の中で述べている。

当時スペインが南米で掘り当てた金や銀は、めぐり廻って、絹や茶や陶磁器を輸出する中国に、世界中から集まってくる構図の時代があったのである。それが産業革命で力を蓄えた欧米の植民地主義を生み、横暴極まりないアヘン戦争で、中国が一時没落を余儀なくされたと思えば、2世紀前の旧態

に復しただけともいえる。考えてみれば西洋の文明の基礎となった、火薬、羅針盤、紙、活版印刷、暦法、そして資本主義や貨幣さえ、全て中国で発明され、西洋にもたらされて、実用化され産業革命の起爆剤となった。バスコダガマがインド洋に進出するまえのインド洋や南シナ海は、イスラムや中国や日本人などによる、平和的な貿易が行われていたのである。中国の明朝の永楽帝は、宦官の鄭和に7回に及ぶ、アジア、インド洋、そしてアフリカまで及ぶ大艦隊の遠征をさせたが、朝貢を勧めはしたものの土地の侵略や住民を征服することはなく、貿易に専念し、インドからアジアの海は、ヨーロッパが進出するまでは、交易船の行きかう穏やかな平和な海であった。

そのアジア経済が2世紀を経て、やっと往年の面影に復し、現在はアジア発着貨物が世界貿易全体の6割以上を占めるほどの盛況を取り戻している。そう考えることもできる。

中国は、日本に40年遅れて、高度経済成長を謳歌しているのである。GDP世界2位の地位は、今年中国に譲ることになるが、相手は10倍の人口である。素直に、慶賀すればよい。これを、勝ち負けの議論に刷りかえるのはナンセンスであろう。

中国の軍事的脅威をはやし立てる人がいる。大概はそれを飯の種にしている専門家である。確かに、共産党政権になってから、中国は大陸の周辺国を侵略した歴史はあるが、それも、一つは冷戦下のイデオロギー対立に由来し、または西洋の国民国家主義に倣った国境画定の行いであったとみなすこともできる。これからは、新たな侵略行

為は、世界監視の中では恐らく不可能だろう。唯一の残された懸念は、尖閣列島の攻防ぐらいではないか。

勿論、それも当事者諸国にとっては、重大事だろうが、中国の国威誇示行為を過大に考えない方が賢明だろう。むしろ、あるいは内政問題の隠れ蓑と考えればよい。世界の係争地問題は、今後は共同管理方式で解決すれば、係争はなくなる。中国の、一番の弱みは、内紛による国の分裂である。それをどうして起さないですむかが中国共産党の最大の課題である。今まで、サッカーW杯のアジア開催に反対していた中国が、2026年の中国W杯開催に名乗りを上げたという。今年の南アのW杯の最中、中国は“球迷”(サッカーファン)が急増した。中国国民が、これほど日韓のアジア代表を熱狂的に応援したことは、特筆してよい。本田選手のゴールを“本田発動機”と呼んで賞賛した。もし中国脅威論を囃し立てるのなら、むしろ、北京五輪、上海万博に成功して自信を得た中国に、2026年のW杯の開催を積極的にサポートしてやるのが、中国に武力行使を許さない、確かなメッセージとなろう。それこそが、平和的な政治力であろう。

今回の中国旅行中に、毎日、様々な中国料理を楽しんだ。朝昼晩、各地でそれぞれが微妙に違う味付けで、どれもが美味であった。さすがに、机の足以外の四足は全て、料理の材料となる国と言われるだけあって、食材も豊富で、飽きない味である。

中国は、野菜生産世界一である。かつての中国は、内陸にスイカが余っているが、物流が悪く、腐らしてしまい、人口の多い

沿岸部に輸送する手段がないといわれたが、市場主義に転じた中国は、いまは内陸部と沿岸部との、物流は鉄道、道路、船を含めて相当に改善されているので、鮮度のよい野菜・果物・魚肉の流通は、ほとんど問題がないといわれている。政府の号令一つで、物流問題はたちどころに片付き、自由主義国より、効率的である。中国は、北の麵、麦の文化と、南の稲・米の文化を共有する。粉の文化と、粒の文化と言ってもいい。それが、中国の食文化を多彩で、豊穰なものにしている。

中国のアキレス腱は、ひょっとすると一人っ子政策に現れるかもしれない。爆発する人口に対処するために、一人っ子政策は必要悪であったが、今になるとその弊害が現れている。男尊女卑の伝統のある中国では、一人っ子ならば、男の子を欲しがらる。妊娠して、女と分ると、墮胎する。勿論、最近はお産前の、性別を告知することを禁じているが、そこは裏があるので、なかなか止まらない。今は、公称で、適齢期の男女に2400万人の男女差があるという。女性の争奪戦が激しく、花嫁の誘拐も日常茶飯事で、ある省では、省外から来た花嫁の6人に一人が、誘拐妻だという悲劇もある。一人っ子は、さらに数千万人に及ぶ戸籍のない幽霊人口も生んでいるという。2人以上を生むと、年収の5倍の罰金を納めなければならない。金持ちは何とか払えるが、払えない貧乏人は戸籍に載せずに育てるのである。この幽霊人口と、男女格差が生む社会的ひずみは、将来の中国にどんな影響をあたえるか無視できないものがある。大航海時代以前の中国は、人口が8000

万人の頃があった。それが一世紀余りで、3億人レベルとなったのは、新大陸からもたらされた、サツマイモ（唐芋）のお陰だと言われる。グローバル化の一面である。

上海万博に想う

万博の時代は終わったのではないかとかねてから思っていた。

ロンドンに始まり、パリにて隆盛を極め、ウィーンで岩倉使節団が啓発され、昭和の大阪万博では高度成長を演出した。万博は、かつては、輝かしい未来への希望であり、憧憬であり、夢であった。それは人類の進歩・発展への限りない信頼のまなざしの時代であった。万博は新しい商品の陳列場であり、豊かな社会へのデザインであり、よい物を、人より早く持つことにより優越感に浸れる、物神主義の権化の象徴であった。

しかし、多くの先進国では、既に物はあふれ、物への飢餓感が昔ほどはなくなった。人びとは、物や金や地位や名誉を所有することよりは、心の安らぎに幸福度を求める時代に入っている。そういう時代の万博とは、何を目指すべきかとかねてから思っていた。

今回の上海万博のテーマはBetter City Better Lifeである。まさに、世界の大部分を占める都会生活者の質の向上こそが、幸福度の基準になるべきだとの発想だろう。地方に住む人、自然の中で生活する人びとは、金はたとえ無くても、満足度は高い。都会に、森や自然をどうつなげるかが日本館やドイツ館の主要テーマであった。中国の提唱した和諧社会とは、人と人、人と自然との調和ある社会である。

万博は、物や民族や国家に優劣をつけるシステムでもあった。比べることで、万博は成り立っていた。較べることで、進歩が確信できた。

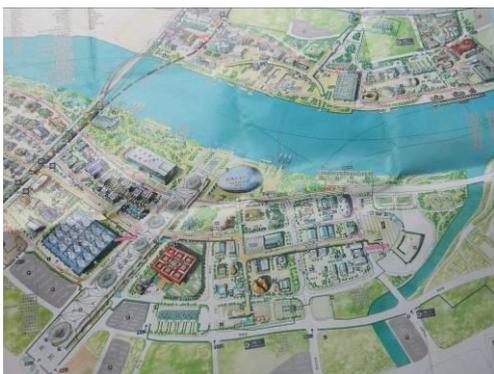
だが、和諧社会とは、比べるのではなく、人々が差別なく生活し、お互いが信頼し合い、それを幸福と感じる社会のことであろう。そういう意味で、万博の時代は既に終わったのである。上海万博を見て、すでに

人類の未来に対するわくわく感がすでに失われたことを実感して、改めてそう思った。それで、万博を見た目的は果たせた。あとは、西洋が、産業革命以降に世界に広めてきた、国民国家の囲い込みを超えて、地球規模での発想に基づく、新しい未来をどう築いていくかであろうか。それが今回の旅の感想である。(完)

上海万博ツアー雑感

岩崎洋三

特別寄稿



米欧亜回覧の会のツアーには乗り遅れてしまいましたが、幸い別の上海万博ツアーに参加する幸運に恵まれました。この「裏番組」についての一文中「紙上参加」させていただけるのは大きな喜びです。

《堺屋太一さんの似顔絵》

このツアーに誘ってくれたのは、下町の中小企業の3代目社長さんでした。事前に、法人会仲間を中心に15人規模とは聞かされていましたが、出発の成田空港で挨拶した方々は弁護士・芸大教授・女優・スナックのママなど多彩でした。共通項はスナックの様でした。自己紹介が終わって、ツアー・バッジが配られました。絵柄はなんと日本産業館プロデューサー堺屋太一さんの似顔絵。ツアー・リーダーが堺屋さんご親戚の由で、同行する芸大教授に制作を頼んだとのこと。という次第で、ツアーの盛り上がりが大いに期待される出発風景でした。

《経済大国中国》

小生中国は今回が初めてでしたが、銀行員時代に国際部でアジアを担当していましたし、東南アジアに通算6年駐在した経験もありましたので、中国は解っているつもりでした。しかし、上海空港に着き、出迎えのバスで市内のホテルに至る過程で、その先入観はいとも簡単に打ち砕かれてしまいました。巨大でモダンな空港のターミナルビルに始まり、道中次々に現れる高層マンションや高級分譲住宅群、そして市内に林立する超高層オフィスビル、道路には自

動車が溢れ、「中国のGNPがアメリカを抜いた。」を実感しました。

大学出のインテリ・ガイドの話では、上海市の登録人口は14百万人に加えて、出稼ぎや外国人が6百万人もおり、合計20百万人は北京の倍の由。急激な人口集中で不動産価格は短期間で10倍になるなど明らかなバブル、貧富格差の拡大も尋常ではない様で、アフター万博が思いやられました。この意味で、今回のツアーで地方を見られなかったのは残念でした。

《万博はデズニーランド?》

万博会場に向かうバスの中で、「万博来場者数は平日40万人、休日50万人、期間中全体で7000万人」とのガイドの説明に恐れをなしました。駐車場につくと案の定数え切れない大型バスの大群が駐車しており先行きが思いやられました。しかし、入場してみると、愛知万博の3倍という広大な敷地の故か、会場内の混雑振りは予想以下でほっとしました。

最初に見た日本産業館は、鉄骨丸出しの不体裁な建物でした。元造船所だった由で、岩倉使節団も訪れていた所と聞いて大感激。入り口前に大勢が群がって壁面を見上げていたのは、3体のロボットが、手足、頭を巧みに動かして壁面を上下する様。動きが面白いので、しばし見とれていると、隣にいた件の社長さんが「あのロボットにはうちの歯車が使われています。」とささやく。ファンタジーの世界から、現実に引き戻されはしましたが、「日本の中小企業健在」という嬉しい思いをしました。館内に入り、堺屋太一さんのブリーフィングを聞いた後、スポンサー企業ごとの展示場を見て廻りました。しかし、大半がTVコマーシャルと

思しき映像が中心で、万博初めての小生は期待が大きかっただけに、そのヴァーチャルぶりに正直がっかりしました。

翌日行った中国館は、建物が現代の紫禁城かと思まごう巨大なものだっただけ期待が膨らみました。予約しているのに1時間半も並ばされ、やっと入場してみると、いきなり万里の長城の様な巨大なスクリーンが目に入る。映し出されている墨絵様の絵の人物や船が動いている。その壮大さと、映像技術の巧みに驚く。気がつくと、館内は壁といわず、天井といわず、コンピューター映像が映し出されており、この分野で中国が相当進んでいることをうかがわせました。別のフロアでは、観客をトロッコ列車に乗せてディズニー・ランドのイツ・ア・スモール・ワールドまがいのことをやっていました。という次第で、中国館もコンピューター・イメージとファンタジーの世界、またまた、これが万博なのかと悪口が出てしまいます。

この日の昼食はトルコ・レストラン。オーナーは東京の神楽坂でSofraなる店を出している人で、愛知万博にも出店していた由。ベリーダンスを見ながら長時間盛り上がってしまい、挙句の果ては、「万博はもういいや!」ということになってしまいました。結局オーナーの奨めるトルコ館も含めてあと3館見る予定を急遽取りやめ、代わりに、サーカスに行くことになりました。

《上海雑技団は「妙技団」》

サーカスは上海雑技団というもので、いくつもグループがあって、日本でも見られる様ですね。劇場風の館内に入ると、舞台の上でブランコ、椅子乗り、皿回し、自転車、はては地球儀状の籠の中を5台ものバ

イクが駆け巡るなどなど、金メダル級の妙技がテンポ良く繰り広げられました。1時間半くらいの間、手に汗握り、息をつく暇もないくらい圧倒されました。幼少のころから鍛え抜かれたエリート集団の技は、正直万博を凌ぐものがあるとさえ思いました。「雑技団」ではなく、「妙技団」と言うべきですね。

《 豫園と外灘 》

豫園は明の時代に四川省の役人が両親のために18年かけて造営したという庭園。当時の役人の権力の強大さを感じさせる庭園でした。立派な庭園で、周辺の商店街が同時代の街並みを装っていて、やっと「中国」に来た気分ひたる事が出来ました。勧められて、お土産屋で格安の手彫りのはんこを3本注文しました。20分足らずで彫り上がって来たのでびっくり。昔、香港でスーツを一晩で縫ってもらったことを思い出しました。人手は豊富なんですね。

ホテルへの帰り道、20世紀初頭の租界外灘をバスでドライブ。照明で浮かび上がったヨーロッパ風の街並みの美しさに感動しました。主要ビルの大半が銀行だったのは印象的でした。今と違って銀行が役にたっていたのですね。そう言えば、日本の森ビルが建てた上海最高101階建ての上海ヒルズは「上海環球金融センター」と言うそうで、今の中国は金融ビジネスには美味しい地域なのでしょうね。

《 空港まで7分! 》

市内から空港までは約15キロ。来たときはバスで30分くらいかかりました。ドイツの技術で万博に間に合わせたリニアモーターカーは、これを7分で結ぶと聞いて、急遽バスの予定を変更して体験することに

なりました。高架の駅舎や車両は通常の鉄道と変わりありませんが、走り出すと未体験の世界でした。加速はスムーズで、あっという間に新幹線並みの時速200キロに達したと思ったら、その後もぐんぐんスピードを上げ、遂には最高時速431キロに達しました。ここまで早いと、流れる景色に目が追いつかない不思議な感覚になり、思わず歓声を上げていました。国土の広い中国には最適の乗り物と思うのですが、なぜか計画の万博会場乗り入れが実現されず、上海-北京路線も中止されてしまったそうです。コストの問題か、安全の問題か気になるところです。帰国後聞いた話では、日本のリニアモーターカーが10センチ浮上させるどころ、上海のものはたった1センチだそうで、安全率が10分の1とも思えて、ちょっと不気味になりました。

《 人材豊富 》

帰りの機内で、隣の若い女性が、「その英字新聞読ませてください。」と遠慮なく言って来た。話を聞くと、アメリカに1年留学したので英語は出来るが、将来は日本の大学に入学すべく、まずは東京の日本語学校に入る予定の由だった。バス・ガイドもそうだったが、中国にはものおじせず、向学心旺盛な若者が少なくない様に思われました。

今回の旅行では、国際都市上海の、それも万博開催中という極めて特殊な中国しか見られませんでした。今の中国が人材豊富、意欲旺盛で、それこそ岩倉使節団の時代の日本の様な澁刺さを感じました。日本がそれに伍して行くには、相当の知恵と努力そして我慢が必要と思わざるを得ませんでした。以上

編集後記

* 楽しかった中国旅行の文集が完成いたしましたので、お届けいたします。紀行文をお寄せいただいた方々には、感謝申し上げます。寄稿がなかった方もおられますが、投稿自由とすることで、あえて無理強いは致しませんでしたので、ご了解下さい。本文集を旅の思い出のよすがにさせていただければと念じます。

* 特別寄稿として、別途万博に行かれた、会員・岩崎洋三さんの紀行文と、中国ガイドの鄧鉄輝さんから泉三郎さんに寄せられたお便りを、鄧さんには無断で掲載させていただきました。事後ながらお許し下さい。

* 旅の写真を随所にちりばめました。場所の注釈を付けませんでした。写真を見ながら追体験してください。口絵の、下段の写真は、星海公園の海を眺める会員たちです。

発行日：2010年8月22日 編集責任：小野博正 米欧亜回覧の会発行

非売品：参加者・寄稿者へは無料配布